

主の徳川頼倫侯も、夫々世話をしかけて見たが、未だ曾て一たびも談が纏まらぬ。惜いものだと言はぬ者はない。

斯くて、彼は超然として自ら跡を江湖に晦まし、何を求むるとしもなく、兀々として、書を読むか、文を綴るか、標本を作るか、酒を飲むかで世を送つてゐる。偶また天氣が晴れて氣分でも宜ければ、飄然と標本の採集に出かける。標本の採集といへば、胴亂を肩に、烏打帽、半ズボンのハイカラ姿で出掛ける者のやうに聞えるが、彼は垢染みだ單衣に、細帯を締めて、足には見すばらしい冷飯草履、片手には金槌、片手には魚籠を提げて、ぶらりぶらりと出て行くのである。

筆を獲麟に止むとする。(四十二年五月「大阪朝日」)

### 大森放語

一

何がしの儀式又は集會と云ふものに、往々新聞記者の参列を斷る事あり。強て参列を求むれば、何分會場間狭の爲め、御頼みには應じ兼ねれど、中なる模様は、後にて委しく申上ぐべければ、新聞の材料には決して事缺せ申さずなど言ふ。人を馬鹿にせること、是より甚だしきものあらんや。凡そ新聞の材料になると、ならぬとは、黒人が黒人の目で觀で、始めて分ることなり。俗人原の知り得べき所に非ず。來會者の姓名や、會場の裝飾や、演説祝辭の順序など、素人が見ても分るべき程の事を仰

仰しく新聞紙に書き立て、得たりとせる時代は、業に既に過ぎ去り了ぬ。六號活字の三行雜報の端の方にこそ入れなれと思はれ、入れもせめ。誰かは之を、記事の『材料』など唱へて、珍重せんとはせんや。參列を許さぬものならば、許さぬも又已むを得じ。唯其の言譯に事缺きて、一步を新聞記者が繩張内に踏み入れ來るが如きことあらば、危し、汝が首の立どころに飛ばんとするを悟らずや。

二

親しき友の手を傳ひてか、又は理由なく人に飯を食はせおきて、さて某々の事を新聞に掲げ呉れよと頼みに來る人あり。又某々の事は書かずに置いて呉れと申込み來る人あり。僕は

斷乎として兩つながら是れを斷る。

有を無とし、白を黒としたらん限ならば、知らず事實を事實としての上にて、書くか、ぬを決するは、其の事の世に及ぼす關係如何を見て、新聞記者が自ら判斷すべき公の職務に屬す。私情を以て如何かすべき問題ならんや。書かれて惡き事ならば、初めよりさる不埒千萬の事をせぬがよし。若し又書かれてほしき事ならば、請ふ先づ書く丈けの價を之が爲に作りて來れ。詩人(一)としての僕は、泣きも笑ひもすべけれど、東京朝日新聞記者としての僕に對しては美人の紅涙も、壯士の恫喝も、總に要なし。如何に況んや、目を黃白に晦まし、耳を口腹の慾に假さんとするが如きをや。如何なる親しき友の仲立なりとも、如

何なる山海の珍味を重ねたる御馳走なりとも、書け書くなと云ふ注文ならば、僕は兩つながら断じて之を断る。

三

僕は振舞酒を饗されたの芝居を觀若しくはフリーパスで汽車に乗ることなど、孰れも皆大嫌ひなり。わきて大嫌ひなるは、たゞで書物を貰て批評を頼まるゝに過ぎたるはなし。贈らるゝ好意は感謝に餘ありと雖も、贈る者の眞意は僕をして腹にもなき御世辭を言はせんとするにありと思へばなり。初め僕は斯の如き書物に限りて、必ず悪口を云ふことゝ定めおきたり。然るに、其の後に至りて、悪口にてもかまはず、是非に何か書けと云ふ者甚だ多きに及べるを見たるが故に、僕は貰

へる者は貰ひ放しにして、一切何事をも言はざる事に決心を改めたり。さりながら斯くても尙僕の心弱きに乘じて之を動かさんとてか、頻りに書物を贈り來るものあるが故に、僕は今日以後僕の親友よりするに非ざる以上、一切の書物の無代價贈呈を盡く受けざらんことを公盟す。批評すべきものならば、誰に言はれずとも、僕は奮つて之をなすべし。讀んで見たき書物ならば、自ら之を買ひ求めたりとて、何ほどの費にかならんや。兎ても呉れるものならば、呉れ！ 呉れ！ 小野道風の書ける和漢朗詠集でも呉れ！

四

嫌ひなものを言へば、今一つ僕の嫌ひなものあり。約束なく

して私宅に人を尋ね來ること。是なり。僕は平素自宅に居ること極めて稀なれど、偶家に在る時は、是れ原稿の最も忙しき折か、又は一日の業を終りて、ゆつくりと身をくつろげたる折なり。僕の私宅は朝に事務室たり、夕に休憩場となる。其の何れの時に於てするも、突如人の訪ひ來らんは、均しく僕の甚だ迷惑とする所なり。

用談ならば、請ふ社の應接室に於てせん。無駄談ならば、俱樂部も可、お茶屋も可、已むなくんば、待合も亦辭せず。唯私宅に至つては、僕も人を此處に訪はざるが故に、人も亦僕を此處に訪ふこと勿れ。

五

朝日新聞に入社したとして、其の周旋を僕に仰せつくる青年、近頃日に多きを加ふ。是れ誠に閉口の至りなり。試みに履歴書を徴すれば、何年何月とやらに生れて、某々の學校を卒業しつと言ふ。斯の如き戸籍謄本見たやうな履歴書を作るにつけても、其の人の新聞氣なき事が推し測らるゝなり。更に試みに、何か書いたものをと促せば、二日三日程経て、幼稚なる政治論か、さては半詩半散文の小篇を寄せ來る。夫れ新聞は事實を主として議論を客とするもの、論客の如きんば殆ど要なし。非個人的なる新聞記事の筆者は、豈敢て藝術の自由を云々する底の大文學者を要すべけんや。

何が故にか、彼等は履歴書をといはれたる時、其の經歷中の

最も新聞記者的なる一二項を擧げて、以て之に應せんとはせざる。又何が故にか、何か書いたものをと求められたるとき、咄嗟身を挺して、其の日其の時に起れる最新事實を探り來り、社の探訪員が未だ其の記事を仕上げざる間に、逸早く自ら之れを仕上げて、以て他と其の敏速を争はんとは試みざる。

僕は一介の陣笠なりと雖も、若し眞に能く野に拾ふべき遺賢あることを知らば、何すれぞ夫れ、之をわが總大將に推薦するに吝なるものならんや。

### 非詩人詩語

一

或る年の夏の夕暮、鎌倉の某禪庵の墓場を散歩してゐると、とある卒都婆の端を小さな黒いものが這ひ上つて行く。能く見ると蟬の蛹だ。翌朝同じ所を何心なく通つて、見るともなく、件の卒都婆を見やれば、昨夜の蛹は早脱殻となつて、卒都婆の頂の、吹いたら落ちさうな危なつかしい所に留つてゐる。

古い卒都婆、蟬の脱殻今にも落ちさうな無分別な身の置き處——何やら物になりさうなとは思つたが、到頭何も出來なかつた。

二

住み棄てた蜘蛛の古巢に、螢が引掛つて光つてゐる。二日ほど経つて、螢は死んだ儘でまた光つてゐる。如何にも好詩料『蜘蛛の巢に螢果敢なく光りけり』として見たが、『果敢なく』がきざだ。『螢一つ蜘蛛の古巢に光りけり』では、引掛つてから死んだ迄の螢の履歴が分らぬ。『螢一つ蜘蛛の古巢に死を光る』は、愈まづい。兎つ措つ思案の末、發句なんてなものは、閑人のあほうが作る者と悟つて思ひ止つた。

其の後渡瀬博士の『螢の話』を読んで見たら、螢が他の蟲や鳥に食はれて、其の腸胃の中を通過して、糞になつて出て、まだ光つてゐるとあつた。糞になつて迄光るとはえらい。斯う

なると糞は詩境を超越して來る。愈發句はやめた。

三

一年、舊正月の十五日、北國の或る土地の宴會に出たことがある。後れ走せに來て僕の前へ坐つた藝妓といふのは、年の頃十八九の美しい女で、其の頃流行つた元祿風の装ひ、身にはめたやうに能く似合ふ。之が其の遅くなつた理由を、隣に坐つた朋輩に語つてゐるのを聞くと、此の邊では女の十九の厄年には、厄落しとして、正月十五日の晩に、人の門口に立つて、九軒とか十軒とかで、餅を貰ひに廻る習慣があるのださうな。此の女は、今しも其の餅貰ひから歸つた所だといふ。『ほらッ』と言つて、私かに朋輩に見せてゐる所を横目で覗くと、成程、彼は例の

はでやかな振の袂の中に、しこたま餅を入れてある。

此の無邪氣な女の顔を見ながら、今の話しを聞いてみると、其の餅を貰ひに行つた様が目に見え、今宵陰曆十五日、照り渡る月、滿地の白雪、恥かしげに人の門邊に窺ひ寄つた乙女、年は十八九、花の如き顔、繪にも似たるはでやかな元祿風の装ひ、――何しても詩だ。詩だとは思つたが詩は出来なかつた。

四

夕風のうすら寒いシベリアの野の中に、あるかなきかに立つた、小さな停車場があつた。慕直に馳せて来た急行列車が、少憩みもせず走りついで、此處を通り過ぎると、一町も行かぬ内に、小さな踏切があつて、其の踏切に、しよんぼりと唯一人、扮

装の賤しい十二三の女の兒が立つてゐる。僕はふと思つた、一日の野仕事を終へて、やつと家へ歸らうといふ所、家には父も母も晚餐の支度を調べて、待つて居らう、悪くすると、弟か妹が病氣で寝てゐるかも知れぬ、片時も早く、急いで歸る途中で、理不盡にも、斯う此の汽車で足を止められたのは、定めて心苦しかつたに相違ないと思ふと、堪らなくなつて、僕は咄嗟、汽車の窓から、手にした花束を、此の兒に投げてやつた。見るく姿は夕暗の裏に消えて、花束は届いたか届かなかつたか、僕は知らぬ。

之こそ詩だと僕は思つた、早速筆を取つた。

『家路に急ぐ汝ぞとも』

とやつて見た所が夫ぎり二の句が續かぬ何としても續かぬ。せうことなしに、ずつと端折つて、逆に結句から始めた。

『今わが投ぐる花束を、受けよ童いへづとに』

之では腰折どころか、胴切れた馬鹿臭くなつて、とう／＼やめた。

五

今一つある。光明皇后の事だ。

皇后が莊麗な浴室を構へて、施浴を行ひ、手づから千人の垢を搔き玉はんとしたことは、人の知る所である。自ら湯女の姿に身をやつし、脛をかゝげ、襷をあやどつて、日々幾十人の垢を洗はれたが、愈千人に満たんとした時、全身膿だらけの癩病が

やつて来た。皇后は之をも嫌はせられず、膿爛れた身を甲斐甲斐しく洗ひ流された上、剩さへ病人の求めを容れて、膿の痞へたまつたのを、花の如き御口にて吸ひ出されたとさへある。

之だけなら、詩にならぬが、其の次に起つた事が、何しても詩だ。白隠禪師の『於仁安佐美』の中に斯うある。

斯くて、皇后の仰に、如何にかたゐるよ、光明子が癩瘡の膿血を吸出しにきと、相構へて、忘れても、人にばし語りそ、と宣ひければ、病者もぢ／＼と這ひ起きて、皇后の御顔をつくづくと打目守りて、光明子よ、相構へて忘れても、阿闍佛の血膿を吸出しにきと、人にばし語り玉ひそと、言ひも敢へず、阿闍如來紫摩黄金の肌、赫爍として大光明を放ち、異香



室内に薫じわたり云々

之ほどの詩境を歌はぬといふがあるものかと、何時も口惜しくて堪らぬが、僕には何しても出来ない。(四十二年一月「東京朝日」)

東洋

西洋

「日本及び日本人に答ふ」(余の好める及び好まざる史的人物)  
にて僕の好めるは、柳澤淇園、好まざるは、井原西鶴なり。  
嫌ひなものは、釋迦なり、釋迦は僕等が奉ずる宗旨の親方なれど、從來釋迦を齒きたるものを見るに、執も色の黒い、でつぷりと太った油氣の多さうな、腋臭のくささうな人ばかりなり。僕はアンナ奴が嫌ひなり。  
では羅馬のジュニアス・アルタスと、埃太利のマリア・テレザが好きななり、アルタスの爲す所、盡く僕の氣に入らたれど、其の中にも彼が陣中にポリビアスの拔書をし居るところ、最も氣に入りたり。マリア・テレザの如き妙齡の美人が、凶惡無道なる普魯西のフレデリックと戦つて風せず、兵馬控惚の間に十四子だか十六子だかを擧げたるは、えらし、彼は實に近世史上の花なりと僕は感心して居るなり。  
天にも地にも大嫌ひなるは、英吉利のフランシス・ペーコン。

### 雲水行住

#### 一 二本の警策

母を毆つてやらうと思つて、警策を二本鎌倉で誂へた。

警策といふは、扇子を疊んだやうな恰好の、やゝ末廣になつた薄い板で、長さが三尺五六寸、幅は廣い所で二寸もある。何に使ふ物かと言へば、其の名の示すが如く、人を毆りつける道具である。凡そ禪僧が使ふ所の不思議の小道具數々ある中に、此の警策ほど禪宗的に出来たものはない。夫れ、珠數、拂子、麻姑の手などとは人の知る所だが、其の外に、禪板とて、坐禪の時頤を支へるに使ふ短い棒がある。竹篋とて、人をはり飛ばす爲に、竹を

薄く削いで、篋の様に作った物がある。拄杖として、錫杖の頭の取れたやうな長い金の棒がある。恐しいものでは、鐵如意。昔は彼奴でくわんと人の頭を食はしたものださうな。うるさいものでは、笏。如意とは似たもので、維摩居士方丈の室の大きさ十笏など、古書に有るのは夫だ。やかましいものでは、戒刀。まさか今日には使ひもしまいが、昔は萬一の用心にと、懐に吞んで、いざといふ時、斬つて出るに用ひたものだといふ。擧げ来れば、其の外にまだ幾何も有らう。有りはしやうが、さて警策ほど機鋒峻峭、如何さま禪宗坊主が持ちさうなと思ふものはない。麻衣の裳短に褰し上げて、警策肩に盪然と立ち、近づく者もあらば、一氣に打下さんず身構へた禪僧の姿は、慥に粹だ。斯うした所を見

ると、一寸麥八分の粥で腹を固めた人とは覺えぬ。

警策の用法といッば人を毆るに在るが、併し毆るにも色々ある。行脚の僧が寺へ来て投宿を求めた時、斷つてもく動かぬとなると、仕方がないから、來客應接の役を承はる知客寮の者が、警策を以て四の五の言はせず叩き出して仕舞ふといふやうなことがある。が併し警策の最も能く使はれるのは禪堂の中である。堂内でやゝ暫く定印を結んで結伽趺座してゐると、肩が凝る。睡氣がさす。其の時警策持つて土間に控へた雲水に頼むと、彼は得たりや應と寄つて来て、頼んだ男を少しく横ねぢりに屈ませておいて、丁度肩胛骨と頸推との間あたりを流々と引つ叩く。薄い板とて、叩く毎に恐ろしい大きな音を立

てる叩かれて了へば、氣がすうとして睡氣も覺めれば、肩も一時に軽くなる。少しは痛い、後は非常に快い。何時も肩が凝ると仰せらるゝ、母刀自の脊中を、此奴で一つ思ふさま殴り据ゑて見たらば、と思つて、偕こそ僕は二本警策を注文したのである。

鎌倉へ来た次手にと、試みに圓覺寺へ寄つて、塔頭の續燈庵を尋ねた。和尚に右の次第を斯くくと話すと、母を殴るのは宜いが、殴るにも法があつて、上手にやらぬと怪我をする。殴らせる方でも、肩の屈め具合をよくせぬと、殴る拍子にぼつきと警策を折つて了ふことがあると、和尚がいふ。夫には指先に渾身の力を注いで、しつかと警策を摘んだまゝ、兩足を揃へて、眼

を正眼に構へて、無二無三に打下すに限るのだが、打下した儘で押へては恐ろしく痛い。打下すが早い、か撥ね返すやうに直ぐ警策を上げなければいけぬなど、段々くむづかしいことを言ひ出した。果は口先では目だるい、でも思つたか、突然立ち上つて、恐ろしい眼つきをして、今にも僕に飛び菟つてくる様な顔までして見せた。其の顔を見ると、むらくと其の昔和尚が、片肌ぬぎの後鉢巻か何かで、臺所に青大將の出たのを追つかけて回つたことが思ひ出されて、思は我知らず、十年前の禪堂生活に立歸る。

## 二 夏末の接心

ふと庭の面を見ると、崖の下に橙の樹があつて、今八月半ばといふに、青うなつた橙の實が、枝もたわゝに累々と生り下つてゐる。其の周圍を嚴しく圍んでゐる居らうものなら、それこそ徒然草の言分通り、『此の木なからましかば』とやる所だが、此處のは、唯他が生るに任せて、取りもやらず捨置いてあるだけに、大分罪がない。丁度僕の居た頃も、此の橙の青くなつて枝に残つた夏の眞盛りであつた。

夫が夏末の接心の始まる前であつた。夏末とは一年を雪安居雨安居と分けた雨安居の終りで、接心とは一週間制を結んで坐禪に従ふことである。禪僧の行住坐臥、いづれ心を接せざる時はあるまいが、接心の間は、特に精神を抖擻し、萬事を抛擲

してかゝるといふ。此の間には、參禪の度数も増され、坐禪の間も延ばされ、禪堂は殆ど晝夜僧俗の爲に公開して、出入は必ずしも堂内の僧に限らぬとしてある。今年などは、山内の塔頭に夫々分宿して、此の接心に加はつた俗人が、彼此五十餘人もあつたさうな。僕等の時も二三十人はあつた。學生もある、實業家もある、役人もある、學校の先生もあつた。随分賑しかつた。中には女もあつた。男をひとしなみに居士といふやうな具合に、斯ういふ女を禪子といふ。之をゼンコと讀むから可笑しい。斯ういふ社會では、修行の進む進まぬに拘らず、古くから居る者ほど幅を利せる。居士でも、古い者は『久參底』など唱へて、僕等新參底を馬鹿にしてかゝつたものだ。幸ひに、此の久參

底の中の友人が、前以て僕等の爲に、宿や食事や入門の手續やら、一世話を焼いて呉れたので、僕と今一人同窓の友人とは、來ると其のまゝ、此の續燈庵の客となつて、何でも接心の前の日、隱寮で老師に相見を遂げた。老師といふは、専門道場の總大將で、其の居る所を隱寮といひ、之に面調することを相見といふ。其の時の老師は、前圓覺管長釋宗演師であつた。若い人であつたが、矢張り敬稱して老師と唱へた。僧堂の坊様達は、ずつと碎けて、一掴みに之を『ヲヤジ』といふ氣取つては、『老漢』などといふ。時の隱寮を楞伽峯と唱へたので、楞伽老師とも言つた。號を取つて言へば、洪嶽禪師、禪宗臭く言へば、圓覺老漢。之に此の邊の村人が唱ふる『管長さん』を加へれば、いやはや

禪宗坊主の名前ほど、ごてくさと澤山なものはない。管長といへば、眞宗本願寺派管長伯爵大谷光瑞など、來ると同じ管長ながら、正しく王侯將相の豪華を極めても居やうが、臨濟宗圓覺寺派管長では、流石に枯淡の生を命としてゐるだけあつて、萬事が質素なものだ。何でも其の頃管長が管長として收むる所の給料は、一箇月大枚金五圓だとか聞いた。相見滞なく終つて後、僕等は此の續燈庵に歸つた。愈々明日から接心の始まりといふので、何かと用意が忙しい。先づ着流しではいけないといふから、古い小倉袴を一着買ひとゝのへる。何よりも大事なのは、坐蒲團が二枚要ること、一は坐蒲團の代りに敷いて、一つは二つに疊んで尻の下に敷くのだ。之を敷か

ぬと、結跏趺坐した時、腰がぐらついて、心を氣海丹田の下に落着けることが出来ぬと、例の『久參底』が説明して呉れた。今一つは、禪堂の中で團扇や扇子を使へぬから、拂子を一本借りてくる。之で用意は出来た。試みに脊梁を竖起し、牙關を咬定し、眼を半眼に開いて坐つて見ると、威程俗惡僕の如きでさへ、大分勿體らしい佛様のやうな顔になる。

今は接心を待つ迄となつた。僕等居士の身でこそ、投宿も相見も、友人の世話で苦もなく一日の間に出来はしたれ、之が雲水の僧の身であると、行脚から投宿掛錫參堂相見と、中々一通りの手數でない。少し其の邊の消息を書いて見やうか。

三 行脚

『是は一所不住の沙門にて候』とか何とか、尋ねられもせぬ前から、先自ら名乗を上げ、格別急いだらしい氣色も見えぬに、急ぎ候ほどにと唱へて、何時の間にか、信濃から上野の國、佐野の渡に着きて候ふやうな最明寺入道の姿を、唯舞臺の上で見たいけでは、一向雲水行脚の身に格別の苦勞があるとも見えぬ。所が借實地になつて見ると、中々さう容易に、佐野の渡なんどに着くものでない。偶途中で宿でもからうとすれば、先は大抵『主の御留守にて候ふほどに、御宿は叶ひ候ふまじ』とやられる。うつつかり、『さらば御歸り迄是に待ち申さうするにて候ふ』な

どづうくしく出やうものなら、夫こそ大變、此の乞食坊主出て行きやがれ』と來るは定の者だ。

凡そ禪宗の僧と言はれん限りの者は必ず三四年が間禪堂に入つて、然るべき師家に參禪しなければならぬことになつてゐる。其處で小僧上りの坊様は、年頃になると必ず師匠の許を辭して、何れかの専門道場に師家を求める。之が抑も行脚の始まりである。行脚の僧には一定の服装がある。下には鼠か淺黄の無地の衣物を着て、其の上には、冬ならば木綿夏ならば麻の黒い法衣を着る。法衣の上には、掛絡といふを袈裟代りに掛ける。よく禪僧の胸に、袈裟ともつかず、頭陀袋とも着かぬものを首から引掛けてゐるのは、夫だ。法衣の上には手巾として、通常黒

毛縞子の丸ぐけの帯を締める。其の次に玉襷を取つて兩の袖をからげ、更に腰からげの紐を腰に巻いて、之で法衣の裳をたくし上げる。脚には脚半甲掛草鞋を着け、頭には一蓋の網代笠を被ること、今更取り立て、言ふでもない。

之だけなら身輕なものだが、何しろ此の時は、禪僧一人前の總財産を持つて歩くのだから、如何に無一物の宗旨でも手ぶらではいかぬ。其處で先づ肩に肩當を着けて、其の上から俗に袈裟文庫と唱ふる、一閑張の函を肩から胸へかける。此の袈裟文庫が大變なもので、其の中には禮服用の法衣、袈裟はいふに及ばず、座具として、佛を禮拜する時擴げて下に敷く風呂敷の様なもの、安名として師匠から賜はつた法名の書付を入る。其の外

に眞田紐で文庫をからげて、坐禪用の蒲團又は毛布をつけ、之に又、金剛經、般若心經、杯いふお經を縛りつけ、別に持鉢とて五重の入子になつた椀小皿をつける。文庫の横へは、兵士の背囊の横へ靴をつけたやうに、矢立、箸、扇子の類を挿み、更に文庫の後へは、後附と稱して、合羽、剃刀、砥石の類をいれておく。剃刀から砥石迄用意する所は、流石に行届いたものだ。

斯くて服装調つて、一步門外へ踏み出せば、後は其の名の如く、行くも住まるも雲水に任せた抖擻、行脚の身である。之が裕福な寺の秘藏子で、いもあれば、旅費萬端師匠が賄つて、不足もないが、さう旨く行かぬ者は、出發の日から例の重い荷物を下げたまゝ、ていゝと歩き出す。無論路用の用意として十分には

ないから、途々、托鉢して行くのである。托鉢も大勢で廻る所の、所謂連鉢ならば、鉢盂々々と大聲で唱へて、景氣が宜いが、獨坊師では全く以て心細い。『もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行き方を失ふ』時などは、思ひやられる。食事と言つても、宿屋で大びらを切る譯に行かぬから、見も知らぬ家に就いて、點心を求め、點心を求めると言ふと、綺麗だが、つまり食を乞ふのである。朝夕方になれば、同じ宗門の寺を見つけて、投宿を頼む。近頃は何處の寺にも、梵妻なる者が居て、之が他人を邪魔臭がつて、何とか角とか言つて、斷る。希には、道心堅固に行ひ、濟した獨身の僧などが、雲水の投宿と聞いて、珍らしがつて、歓迎した上、翌朝出發の時は、次の宿を紹介したり、草鞋錢を呉れることがある。



るさうなが、そんなことは滅多にない。さて投宿を許された雲水は、先づ本堂に参つて、佛前に袈裟文庫を下して、其の前で主人の沙汰のある迄坐禪する。人手の少い寺と見た時は、自ら風呂を立て、夕餐の仕度を手傳ひなどすることもある。宿つた翌朝は、早く佛前で讀經して後、お茶を饗ばれる。大きな寺なら此のお茶の後初めて主人の住職に相見して、昨夜來の禮を述べるのである。之がすむと朝餐となる。朝餐の後は、又飄然として行脚に出る。

#### 四 庭詰

或朝僧堂の前を通ると、若い坊様が旅裝束の儘、玄關の式臺

に頭を下げてゐた。晝頃に行つて見たが、矢張り元の儘であつた。血が俯いた頭に下つて、顔が眞赤になつて、如何にも苦しうであつた。午後の二時頃に見たら、まだ俯いた儘身動きもせず、に居る。不思議に思つて、病氣でもあるかと其の側迄行つたが、彼は依然として寂然不動、ひたもの俯いて、人の來たのも知らずげな氣色であつた。歸つて例の『久參底』に聞けば、あれが其の所謂『庭詰』なるものだ。と教へて呉れた。

行脚の僧が愈其の目指した道場へ着いたとする。我々なら、長旅に疲れた揚句のことゝて、先づ足を洗つて、浴衣にでも着替へて、一風呂浴びて、さて夕餐の膳の上で一杯とでも言ふ所だが、雲水の身はなかく、斯な贅澤を言へぬ。僧堂には僧堂の

儀式があつて、中々喧しい。新に着いた雲水は玄關で、『頼んませう』と、落着いた悠然した調子で、『せう』を少し引張つて音なふ。初めての時、之が中々調子よく出ぬものなさうな。さて一度では誰も返事をしない。大抵三度音なふと、三度目に初めて、『どうれ』と答へて呉れる。雲水は玄關の隅へ荷物を肩にしたまゝ、腰をかけて、辭儀した儘で待つてゐる所へ、知客寮の使ひに知随といふ役の僧が出て来る。之に向つて殆ど聞きとれぬ位の小声で、己の姓名を名乗つて、何か掛錫を許して呉れと頼む寺に置いて呉れとの意である。立ちほだかつて、『今日は』などゝ來たら、直追ひ出される。

知随は一應知客寮へ取次ぐとて引込む。之は殆ど形式的に

引込むので、間もなく出て來て、『折角だが道場満衆につき斷る』といふ。道場満衆とは、西瓜船に荷が過ぎて、此の上一つも載せられぬといふことである。此の返事をした後、知随は其の儘ふいと引込む。知随が引込んだ後、雲水は又初の通り式臺に頭を下げて、血が下らうが、顔が赤くならうが、挺でも動かすと待つてゐる。之れを庭詰といふのである。やゝ暫く庭詰をして後、又初の通り『頼んませう』をやる。前には三度目位で知随が出て來たが、今度は誰も返事をせずに打棄て、置く。打棄て、置くといふものゝ、知客寮では何處からか始終見張をしてゐる。若し庭詰の間に形装を崩すと、乃至は居睡でもして居れば、瀾又回らすべからずで、此奴下根の凡夫と見られて、早速叩き

出される。畢竟此の庭詰なるものは雲水の根氣を試す土段場である。

神妙に庭詰を勤めてゐる中、食事の時分となれば、僧堂の賄方を承はる典座寮の者から食事を出す。食事がすむと、又もとの通り庭詰をやる。其の中日が暮れかゝると、悪辣な師家の居る道場では、之を機會に一應警策を以て追ひ立てる。追ひ立てられた雲水は、已むなく一たびは門前迄出るのだが、大抵は夕方になると、晩課として夕の勤行が始まる時、知隨が來て、兎に角投宿は許すとなる。掛錫は兎に角、今晚は泊めてやらうといふのである。

此處に至つて、彼は始めて草鞋を解いて、旦過寮といふのへ

通される。長い間庭詰をした後として、此の頃には、手が痺れて頭がふらくするさうな所で、此の又旦過寮なるものが一通りの泊でない。

### 五 旦過寮

旦過寮とは、通例玄關の傍に在る狭い薄暗い部屋である。やつとの思ひで、此處へ通された雲水は、先づ投宿帳へ住所姓名をつける。つけた後は如法に坐禪をする。談相手など無論ない。久參の雲水が時々此の邊を通り掛る毎に、意地悪く隙見をするので、寢轉ぶなどは愚か、横坐りも出來ぬ。僧堂に依つては、此の旦過寮の戸に小さな穴を明けて、外から人知れず隙見の

出来るやうにしてあるさうな覗いて見て、中なる雲水が神妙に坐つてゐれば格別、左もない時は、容赦なく投宿を断つて、追ひ出す。油断も隙もなるものでない。

夕餐は僧堂の大衆と一緒に済ませて、夜は又坐る、解定とて、禪堂を閉ぢる板の音が丁々と響き渡るを待つて、初めて床に就くが、其の床といふのが僅に煎餅蒲團一枚で、之を柏餅にして其の中へ潜り込む迄、枕もなければ灯火もない。嚴寒烈冬の時と雖も、一點の火の氣はないのである。

此の夜は此處に圓かならぬ夢を結んで、翌朝は二時か三時頃に大衆と共に起きて、本堂で讀經する。讀經終つて、朝の食事を済ますと、今度は又知隨の僧が出て来て、『投宿だけは許し

たが、今朝は早々立つて呉れ』と言ひ渡す。仕方がないから、又もや旅装束を整へて玄關に下りる。下りたとして無論出て行くのでない。又もや昨日と同じやうに、式臺に俯いて、庭詰を行ふのである。着いた當日の庭詰なら、時間を計つて、晝過にでも來れば、半日で済むが、二日目の朝からは、朝から晩までだから、中々痛い。其の間には、便所に通ふのと、食事に立つ許りである。食事は昨日同様、曲座の者が食はせる。

斯くて、昨日同様夕の晩課の時まで、首尾よく庭詰を勤め上げると、此に始めて庭詰の苦患を救されて、旦過寮の投宿を許さるゝことになる。尤も人により、所によつて、此の庭詰を三日も四日も續けられることもある。但し如法の服裝を調へて、如

法に庭詰をさへ行へば、他宗の者でも何でも構はず、入れてやることになつてゐる。

さて旦過寮に入られられても、中々掛錫を許さうとは言はぬ。さし當り二三日は、旦過寮の狭い薄暗い中で、食事と讀經の外は、坐禪三昧で暮さなければならぬ。二三日なら宜いが、此の坊主何やら道樂でもして來た奴らしいとか、前の寺を失錯つて來た者ぢやないかとか疑はるゝ時は、懲しめの爲として、五日も六日も旦過寮に捨て置かるゝことがある。初から紹介狀を持つて來るではなし、戸籍謄本を見せる譯でもなし、何處の馬の骨とも分らぬ者が、何時何處から押掛けて來るとも知れぬことゝて、僧堂の方でも油斷はせぬ。殊に斯うして投宿や掛錫

を求めぬ雲水は、必ずしも初心の坊主とは限らぬ。時として、彼地此方の僧堂で相應な修行を積んだ傑物が、舞ひ込まぬとも限らぬ。現に今の建長寺の管長が一應修行を仕上げ、京の建仁寺に掛錫を求めた時、建仁の默雷和尚一目見て、彼奴頭が禿げて道樂坊主らしいから、窘めてやれとか言つたといふので、五日も旦過寮に投り込まれて居たとのことだ。後になつて、二人で此の事を語り合つて、呵々大笑したといふ。

旦過寮で一兩日を送つた後、始めて知客寮へ呼び出される。知客寮の僧は警策を小脇に抱へて、儼かに望み通り掛錫を許す旨を言ひ渡し、許された僧は掛錫帳に記名して、此に始めて彼は堂内の人となるのである。

之から愈禪堂入りの段となる。

### 六 新到參堂

掛錫を許された雲水は、知客寮から聖侍寮へ送られる。聖侍とは禪堂の中に祭つた文珠大士堂内では之を聖僧といふに事ふる侍者の義で、禪堂の出入を司どる喧しい役位の僧である。此の聖侍の案内で、今度は禪堂に送られるのだが、此の時は本威儀として、正式の法衣に袈裟をかけ、白足袋を穿いて出掛ける。禪堂は文珠大士の後の入口から入つて、入つた時、聖侍は聲高らかに『新到參堂』と呼ばゝるのである。何んな坊主が來たかと、堂内の僧がちろ／＼と其の顔を眺める前を通つて、新到

は先づ文珠大士の前で三拜する。三拜終つて今度は直日の前で、其の次は聖侍の前で、低頭する。直日とは、禪堂長の様なもので、之が禪堂を率ゐることになつてゐる。筆の次手に少し僧堂の役位を説明しやうなら、今迄に出た知客聖侍直日の外に典座といふが賄方を勤め、副司といふが會計を承はる。此等は、就も評席と唱ふる古參の僧の中から互選するので、其の堂内に於ける權勢は頗る盛なものだ。評席とは全堂内の僧の中から、師家が三人乃至五人を抜いて、之を命ずるので、一寸勅選議員といふ格に當る。評席の數は必ずしも一定しないので、重大な役位も、評席の外から出ることがある。之から下つては殿司として、讀經の世話をする者がある。隱侍として、隱寮附の侍者がある。

別に知客には知隨副司には副隨とて、次官だか秘書官だかを兼ねたやうながある。此等は年二回、雪安居雨安居の制中の終りに交代することになつてゐる。今度の直日は喧しい男だから、接心中は困るぞなどいふ陰口は、能く聞く所である。

さて、新到が挨拶終つて後、自席に宛てられた所に着いて、兩側に列んだ雲水一同に挨拶すると、其の次に茶禮がある。聖侍がかちくと柝を撃つを合圖に、銘々が出した茶碗に茶をついで回る。之が新舊の顔繋ぎの茶話會といふものだ。尤も茶話會と言つても、話も何もするのでない。黙りこくつて茶をのみただけだ。

茶禮の後、知客に案内せられて、老師と相見をするので、此の

時は新到の者師家の前で三拜し、師家から修行に關する垂戒がある。相見から禪堂へ歸ると、先づ荷物を解いて、夫々に仕舞ひ込む。元來禪堂は中央が土間で、土間の中央に例の文珠大士を祭つてある。土間の兩側は二三尺高くなつて、幅は疊一疊位の細長い座敷になる。之を單といふ。大抵一人を疊一疊に割り宛てる。單の後側に單函といふのがあつて、此處へ荷物を仕舞ふ。ずつと上には夜具を入れる所がある。夜具といつても、夏冬共に薄い蒲團を柏餅にして寝るのだから、簡單なものだ。夜具の下に小さな棚がある。此處へは、茶碗や箸や持鉢を載せておく。

此處まで來て、彼は始めて堂内に落つて修行にとりかゝ

ることゝなつた。僕等門外の者が樂々と半日ほどの間に濟ませたことも、彼等には五六日も費つて、随分嚴重な様々の儀式を経て來たのである。今時斯んなむづかしい儀式が、禪僧の間に行はれてゐやうとは、殆ど偽のやうだ。併しむづかしいことを言へば、まだ追々にある。

七 參禪

愈大接心は始まつた。

午前二時、左ながら盆を覆すが如き大雨の中に、ぐわんぐわんと大鐘が鳴り渡る。之は開静と唱へて、殿司の僧が鳴すので、之に引續いて、ちりんぐわんと巡哨の者が鈴を振つて歩く。之で山

内の常住一同起き上がるのである。頓て引磬の音がちんぐわんと聞える。禪堂で直日が堂内の僧に起床を命ずるのだと、例の『久參底』が説明して呉れた。聞もなく、ちやんぐわんぐわんとけたましく半鐘が鳴る。殿司が讀經の用意を報ずるのだといふ。又間もなく、うぢやぐわんとお經の聲が僧堂の方で聞え始める。お經がすむと、雲板が鳴る。之が朝飯ださうなやがてば、んぱんぐわんと木板の音が響く。開板とて、禪堂の開けた報知だといふ。グワンぐわんから始まつて、チリンぐわんとなり、チンぐわんとなり、ヂヤンぐわんとなり、ウヂヤぐわんとなり、果はパンぐわんとなつて、夫でお仕舞かと思へば、今度はやゝ方角を改めて、こんぐわんと喚鐘が鳴り始めた。嗚呼、何すれぞ夫れ鳴物の多き



やと言ひたくなる。

喚鐘が鳴ると同時に、僕等は夫と許り、雨に打たれた竹の香めでたき木の下道を通つて、隠寮に出掛けた。愈參禪が始まるのである。見るとまだ明けやらぬ薄暗がりの玄關に、早や大分轟々と詰め掛けてゐる。孰も瞑目靜坐ぶつりとも音はさせぬ。此等は喚鐘の前に陣取つて、順番にこんくと二づゝ喚鐘を叩いて奥へ入つて行く。入つた者は隠寮の奥の奥にとつかと坐つて控へた師家の前へ行つて、三拜して後、恭々しく見解を呈する。呈した見解に就いて師家の垂戒がすむと、師家が、りん、んと鈴を振るので、之を合圖に又三拜して出で来る。玄關に控へた者は、此の鈴の音を聞いて、入れ代りに又鐘を叩いて入

る。此の師家の控へた處を室内といひ、此處へ入ることを入室といふ。入室して所見を呈することを參禪といふ。世には參禪も坐禪も同じものと心得た人がないでもないから、此に念の爲に一言を添へておく。參禪とは入室すること、坐禪とは坐ることである。

室内では師家と二人切の差向ひ。四邊に誰も聞く人がないから、何を言はうとも、何をしやうとも、一切構はぬ。但禪門の内規、室内では何をしてもよいが、外へ出ては、一切室内の消息を洩してはいけぬことになつてゐる。之はいろんなことを聞くと、修行の邪魔になるといふのださうな。併し參禪中の珍談は、多く此の室内から出て来る。

やがて順番が来て、僕は喚鐘を叩いて入つた。ちと意氣地のない話だが、此の鐘を鳴らすだけのことでも、腹が坐らぬと申こんくと調子よく行かぬ。況や、之から奥へ入る迄の長廊下を行く足取、又入つて後、せかす慌てず三拜を行ふ態度など、何でも無い様で、實は大に何でもある。人を見慣れた禪宗坊主の眼に、之が分らずにすむものでない。だから鐘の叩き具合、廊下を歩く足音、乃至三拜の仕方だけで、此奴胡散と悟られて、未だ一語を發せぬ前に、りん、と例の鈴で追ひ遣られて仕舞ふことが屢あるさうな。今考へると、僕の三拜などは、腰がふらついて、随分まづいものであつた。

三拜終つて和尚の前へ坐ると、和尚は簡單に禪宗の性質を

説明した後、白隠和尚の『雙手相拍つて聲あり、隻手還つて何の聲かある。』といふ公案を授けられた。此の次の參禪からは、此の公案に就いて僕の見解を呈するといふ譯である。僕は又腰のふらついたまづい三拜をして、此處を出た。

いつしか、夜はほのくと明けてゐる。

### 八 坐 禪

其の頃丁度僕は學校でブライデルの宗教哲學の講義を聽いてゐたので、神とか、宇宙とか、絶對とか、無限とかいふ言葉は人並以上ちやんと心得てゐる積であつた。だから『隻手の聲』なんどいふ謎の様な公案を貰つても、一向驚かぬ態々坐

禪して考へて見る迄もないことと思つた。

隱寮から此の續燈庵に歸つて、神妙に線香を炷いて、一寸坐禪をして見たが、足は痛むし、蚤は食ふし、物の十分と我慢は出來ない。其の中講座の鐘が鳴つて、毒語心經の提唱が始まつたので、之を聴きに僧堂へ出かけた。歸つても一塵分つた積の僕は、一向坐禪などしなかつた。晝過になつて、又こんく喚鐘が鳴つたので、早速隱寮へ驅けつけて、『既に是れ絶對之を有といふも對を絶せず、無といはんも亦對を絶せず、非有といふも當らず、非無といふも亦得ず、即ち是れ隻手の聲』とか何とか、今思ひ出しても、冷汗の出る様なことを得意氣に滔々とまくし立てた。すると、和尚は例のぎよろりとした目で、冷かに僕の

顔を見ながら、『そんなことなら皆書物に書いてある。書物の稽古なら、強て斯んな處へ來なくても、幾何も世間に學校といふものがあるでなア』と來た。

僕はぎやふんと參つた。成程世間に『學校といふもの』がある様な氣もする。和尚は旨いことを言つた哩と思ふやうな氣もする。兎に角、此奴は一寸拳骨で西瓜の鑑定をするやうな譯には行かぬと悟つて、又線香を炷いて、今度は本氣に續燈の本堂で坐つた。

其の中日暮方になつて、禪堂に出掛けた。堂に入ると、兩側の單には、僧俗卅餘人、孰も苦蟲を嚙潰した様な顔して坐つてゐる。僕等は聖侍の前で一寸低頭して、單の上に登つた。暫く坐つ

てゐると、直日が鳴らす引磬を合圖に、足を投出すもある、單から下りて出て行くのもあつた。之が禪堂内の休憩時間で、之が二分も経つと、又引磬が鳴つて一同元の坐に復して、又鳴を静めて坐つた。坐ると間もなく、隱察の方でこんくと喚鐘が鳴る。聖侍が胴間聲で、『直日單より總參』と呼ばゝつた。接心一週日の初中終の三日には、總參とて、禪堂にある者一人も残らず、參禪しなければならぬ時がある。總參に對して通常の參禪を獨參といふ。此の總參には直日の側から順々に行く時と、其の反對の側の者が先づ行く時と、二色ある。『直日單より』とは之だ。外の時は『單頭端より』といふ。

喚鐘の音で僕は實にぎよつとした。僕は入室したとて、丸で

言ふことはないが、總參とあらば、是が非でも行かなければならぬ。乃ち悄然として出掛けた。凡そ禪僧の最もつらいのは、此の總參にある。參禪しても言ふことがない、生半可なことを言へば、叱られる、怒なりつけられる、悪くすると擲られる。さりとて行くまいとすれば、直日が催促に来る、夫でも動かぬと手を取つて引ずり出される。双方負けぬ氣同志の坊主になると、行け行かぬで、到頭取組合を始めることさへある。意氣地のない奴になると泣き出すことがあるさうな。

僕は不得要領な總參を了つて後、又禪堂に歸つて坐つた。坐禪中は、直日を初として、雲水が交る。警策肩に、單に沿つて始終土間を巡邏してゐる。居住ひを崩した者、坐りながら睡に

落ちた者、蚊が食ふとして両手を袴の下に入れた者などがある  
と、軽く警策の端で突ついで注意する。又坐りながら睡氣がさ  
すか、肩の張つた者は丁度自分の前へ来た時合掌すると、巡邏  
の僧は立留つて、警策を平に両手に載せて、低頭した後、相手の  
男を屈ませておいて、其の肩をぼん／＼と叩いてやる。叩  
いて仕舞へば、雙方互に低頭し合掌し合つて、又もや警策肩に  
土間を廻る。下手に叩かれて、我知らず、『ア痛ッ！』など口走  
つて、端なく堂内の大笑ひとなることもあつた。

ちん／＼と引磬が鳴つた。直日が『經行』と呼ばつた。一  
同は單から下りて、土間の中をぐる／＼と歩き廻つた。之は動  
中の工夫を凝す爲とかで、坐禪中足の草臥れた頃に、時々やる。

昔はお經を讀みながら歩いたものだとて、斯くは經行と書く  
のだといふ。

八時頃になつて茶禮がある。聖侍が茶を汲んで廻る。夫から  
駄菓子を二つ三つ宛一同に取らせる。一心不亂に坐り込んで、  
心身共に疲勞した折のことゝて、此の時の茶ほど世の中に旨  
いものはない。茶禮終つてから、參禪があつて九時に解定とな  
る。解定の鐘がなると共に、一同解散して、禪堂は閉ぢられるの  
である。

僕等は又雨を冒して、續燈庵に歸つた。

今朝からの坐禪に、世間には學校といふものゝあることだ  
け悟つたのだ。

九 僧堂の一日

或日『久參底』の者から、僧堂の飯を食ひに行かぬかと誘はれた。

僧堂では、朝十時頃に晝飯が出る。晝飯は齋座と唱へて、日中一番御馳走のある時だといふ。此の日頃芋や茄子許で大分痛め付けられて居た折のことゝて、御馳走と聞いては我慢がならぬ。早速僧堂へ出掛けたや、暫く待つて居ると、先づ雲板とて磬の様なものが鳴つて、始めて飯臺の用意が出来た。間もなく二度目の雲板が鳴つて、堂内の僧一同飯臺の前に居列んだので、僕等も恐るゝ其の片端に着いた。例の通り黙りこく

つて、誰一人口を利く者が無い。静なること太古の如しだ。やがて一同が般若心經だが、十佛名經だかを読み初めた。之がすむと、又五觀の偈といふのを読む。『一つには何やらして、二つには斯やらして、三には何とやら、四には正に良薬を事とするは形枯を療せんが爲なり、五つには道業を成せんが爲に應に此の食を受くべし。ちやきッ！と読み終つて、初めて飯となつた。給仕番の僧が出て、一々給仕して呉れる。其の間一同寂然として、達摩大師は坐禪の體とある。

長いお經に痺痺を切らせた僕は、逸早く飯をかき込もうとする。之は久參底が注意して、箸の端で飯を少し飯臺へ翻せといふ。之は生飯とか餓鬼飯とか言つて、無縁の衆生に施すものだ。

さうな之が濟んで、愈本藝な取立て、御覽に入れやうとする  
と、又しても久參底が注意して、そんなにぐちやくと大きな  
音をさせてはいけぬといふ。見ると成程一同は堅く口を結ん  
だ儘、ぶつりとも言はずに食つてゐる。いやはや窮屈なことだ。  
然り而して、其の所謂御馳走はいふと、麥八分の眞黒な飯  
に、ごと味噌汁といふまづげな汁があるきり、殆ど咽喉を通り  
さうにない。僧堂で折節供養があつて、米の飯でも出ることが  
あると、之を白的と唱へて、何よりの御馳走としてある位で、其  
の外はすべて八分の麥的である。晝が之なら、朝夕は思ひやら  
れる。朝飯は粥座といつて、殆ど水許の麥の粥に、萬年漬が出る  
切り。萬年漬とは、菜葉の鹽漬で、夫も新しいのは決して食はぬ。

古くて臭くて、ぼろ／＼になつた奴に限るから、之を禪語(?)で  
萬年漬と唱へてゐる。夕飯は大抵四時頃に食ふ。印度傳來の佛  
法の制では、午後に飯を食ふことがならぬといふので、特に夕  
飯は藥石と唱へてゐる。之は晝の麥的を雜炊か粥にして食ふ  
のである。斯なまづいものを食つても、人間は達者に生きて居  
れるのだ。僕は今迄贅澤を言つたのが勿體なくなつた。

併し禪僧の苦は唯食事許でない。朝は二時か三時に起され  
て、小さな竹柄杓一杯の水で、口を嗽ぎ顔を洗ひ、夫から夜の九  
時迄は、接心中なら、食事と讀經の外、ぶつ通しの坐禪のし續け  
である。其の間に四度の參禪があつて、叱られもすれば小言も  
食ふ。接心のない時は、様々の作務があつて、掃除、薪割、米搗、風呂

焚洗濯から雪隠の掃除頭の剃合垢の流し合迄した上、己等が食料の仕入にとて、時には網代笠被つて托鉢に出なければならぬ。托鉢にも麥鉢、諸鉢、大根鉢など、時候々々で様々あつて、麥俵をうんとこしよと擔いで廻ることもあれば、野菜鉢の時などは、法衣姿に甲斐々々しく玉禪線取つて、大八車を輓いて歩くこともある。斯くて漸く一日の仕事を終つて、疲れ切つて寢床に入つた所が、例の薄い柏餅の蒲團だ。今時斯んな荒修行が、形式だけでも遺つてゐるのは、恐く禪宗坊主の外にあるまい。僕は、懦弱千萬な當今の青年に、粗食惡衣を事とせず、一日作さずんば一日食はざる底の元氣を養はせんが爲、此等にせめて半年か一年の僧堂生活をさせて見たいと、豫て思つてゐる。

やつと麥的を一杯かき込んで後、お代りと許り茶碗を差出さうとすると、又久參底に叱られた。こんな時は茶碗を飯臺の上に置いたまゝ、合掌して待つてゐると、給仕番が盛つて呉れるといふ。命の如く控へてゐると、給仕の僧が来て、意地悪く山と盛らうとする。はッと思つたが、口が利けぬ。久參底の男夫と察して、盛られて困るなら、合掌した手を急ぎ摺合せと言ふ。之でやつと助かつた。

食事がすんで其の儘立たうとすると、又叱られた。食ひ残した物は皆食つて了つて、夫から箸と茶碗を綺麗に茶で洗つて、其の洗つた茶は呑んで仕舞ふのだといふ。夫がすむと、今度は其の茶碗を何處とやらへ片づけて來いといふ。



いや、僕は飛んでもない御馳走に預つた。

十 隻手三昧

夫から二三日は一心不亂と坐つた。一心不亂とは坐るが、中一、心不亂に行かぬ。ともすれば、夏のこゝとゝて、直ぐ睡氣がさす。蚤が喰ふ、蚊が螫す、眼がしよぼくゝになつて、涙が出る、足は痺れて棒のやうになる、夫も構はずやつてゐる中に、段々肩が凝つて、果は齒齧が腫出して來た。

參禪も、初の程は、喚鐘の鳴る毎、缺かさず出掛けて、何とか角とか理窟をつけて見たが、彼れもいけず、此もいけずと、一々斥けられて、今は早何とも物の言ひ様がなくなつた。屁理窟を言

ふと叱られる、糟妄想だと罵られる、時には和尚が恐ろしい眼玉を光らかして、今にも眞向微塵と打つて掛らんす勢ひを示したこともある。忌々しいから、二度許り續けて、和尚の前へ坐つた儘、何と問はれやうが黙り返つて一言も言はずに了つたことがある。無論叱られるのを覺悟の上であつたが、存外二度とも格別叱られなかつた。これに大に氣を得て、三度目には無言どころか、呼吸もせず、控へてゐたら、今度といふ今度は、霹靂一聲、思ひ設けぬ大雷がぐわアんと落ちた。『幾度もく死人の眞似許しに來やがつて、夫が何の呪咀になる！』とやられた。夫でお仕舞かと思つたら、焉んぞ知らん、一旦落ちた雷が又ごろついで、天地も破るゝ許りの大音聲に、『隻手一本にな

つて来いッ！』と怒鳴りつけられた。ぶッ！隻手一本になるなんて、和尚も中々御冗談者ぢやわい。

斯う小烈くやられると、立つても坐つても居られなくなる。後に聞いた話だが、誰しも、斯ういふ時は、尋常一様の坐禪でいかぬと知つて、様々なことをして見るものださうな。徹夜もする、断食もする、數息觀をやる、大日觀とやらをやる、風呂の中へ坐り込むのもある、時には途方もない處へ籠つて、暫く全く世間と離れやうとすることもある。籠るには圓覺寺の山門、正續院の開山塔、辨天の大鐘堂や、さては山を攀ちて望岳樓の跡の草原などへ出る。甚しいのは、夜に入つて建長寺の上の半僧坊や、其の奥の夜鳴不動などへ出掛ける者もある。今九州某地の代

議士になつてゐる某君などは、寒中不動の瀧を浴びて、單衣一枚でがち／＼震へながら參禪したら、和尚は何と思つたか、夫位の決心でなければいけぬとか何とか、えらく賞め立てた。夫を聞いて、僕の友人何某が、同じことをして、同じ風體で出掛けるところが、今度はそんな荒行が何の役に立つものでないかと冷かされた。人を突いたり引いたり、時と相手とに依つて、忽然として、五枚舌六枚舌を使ひわくる禪宗坊主の老獐は、今に始まつたことでない。

人もすなることを僕もした。續燈庵の裏の、晝尚暗き樹立の中に大きな洞窟が一つある。入口は小さいが、中は廣さ六坪許り。中央に大きな石碑が立つて、其の前に四五寸の高さに石を切

つた壇がある。件の石碑を禮拜する者の坐る爲に出来たものらしい。僕は或夜蒲團と拂子とを携へて、此の壇の上に坐つた。ちつと觀念の眼を据ゑて、坐つて見ると、流石に人の氣はひも絶えた處とて、聞えるものは、唯我が血液の我が身の内を巡る音ばかり。之でこそと大に心を勵ました。夜が更けるに連れて、心は段々亂れて來た。世の中が靜になればなるほど、様々の妄念が浮んで、殆ど我ながら愛想の盡きるやうな下らぬこと許り考へた。夫に秋近い木の葉が時々一つ二つばさりと落ちると、其の度毎にはツと驚いて、心動が烈しくなる。而して始終暗がりの中で、後から何者か、潜び足で窺ひ寄るやうな氣がしてならない。

何でも彼でも隻手一本になる積で、幾度か隻手々々と思ひを凝らす中には、様々の片手が出て來た。大きな手、小さい手、毛むくぢやらの手、節くれ立つた手、圓い優しい手などが出て來て、中にはダイヤ入りの指輪を嵌めた可愛い女の手迄出て來た。馬鹿なと、我と我心を叱つて搔消さうとすると、今度は瘦せほうけた蒼白い骨だらけの手が出て來て、此奴が薄氣味悪くも、僕の方へ手招ぎをする。——僕はぞツとして思はず、『ひやア』と聲を立てながら、飛び退かうとしたが、其の拍子にこつとりとした、か頭を何處へか打附けた。

餘りの痛さに氣がつくと、恥かしい哉、馬鹿々々しい哉、僕は何時しか居睡をして、壇から下へ轉げ落ちたのであつた。

十一 斷食接心

斷食もして見た。

斷食では大分奇談がある。重田風骨といふ僕の友人が、景福庵に籠つて二日程何も食はずに坐つてゐたが、腹の空るに連れて、丁度飯時になる毎に、色々な御馳走が眼の前にちらついで、逆も氣を落付けることは出来ぬ。愈我慢がし切れなくなつて、何か食ふ物をと探したが、飯も菜もない。僅に干海苔を二三枚見つけ出したが、さて二三日火の氣を絶つたことゝて、焼くことが出来ない。到頭せうことなしに、洋燈を點けて、其の火で海苔を炙つて食つたといふ。之は重田の海苔焼事件とて、古い

人は今でも知つてゐる。

まだある。前年滿洲で戦死した陸軍中尉植村宗光君は、文學士になつて後、髪を薙つて僧となつた位の人で、高等學校時代から随分工風に骨を折つたものだ。此の人がまだ初入の公案を透過せぬ頃に、斷食接心とて山門に籠つたことがある。全く何も食はずにゐては身體にさはるとして、堅麩麩を二十一枚用意して、一食一枚と定め、都合一週間籠る積であつた。所が籠つた第一日の日に一枚食つて見たが、逆も足りない。其處で、食分量さへ同じなら、二十一度に分けて食ふのも、一度に食ふのも同じだとして、べろりと一度に平らげて仕舞つた。而して三日何も食はずに坐つた。すると、坐つた儘で腰が利かなくなつて

到頭四日目に、人に助けられて、山門から下りて来た。此の事を何時も語り出して、大笑ひをしたが、嗚呼彼も中道にして満洲の露と消えた。

僕等はまだ馬鹿なことをやつた。蚊接心と唱へて、夜中暗がりの中に、赤裸で坐つたのである。線香を真中に立て、之を取り圍んで、四人程で坐つて見たが、血に渴した山の中の藪蚊が、容赦なく喰ひつくので、痛い痛くないのと言ふ様なとちやない。一分も我慢する中に、身體一面に焼けつくやうになつて、氣が違ひさうになつてくる。我慢の弱い僕は、一番に聲を上げて逃げ出した。蚊に喰はれて最も苦しい所は唇であることを、此の時始めて悟つた。神経が鋭敏な上に、搔くことも、つねるこ

とも出来ないからである。

蚊の次手に、蚤で可笑しいことがある。或日獨りで坐つてゐると、變に足の裏がむづ痒い。蚤だなと思つたが、折角静まりかけた身を、今動かすのは残念と思つて、我慢してゐると、此の蚤能く／＼向上心に富んだ奴と覺えて、足の裏では満足せず、一段腓脛部から股の方へ上り初めた。くすぐつたいのを忍んでゐると、下腹から胸の方へ出て、到頭襟迄来た。襟を出て外へ飛び出すかと思つたら、今度は僕の頤を傳つて、頬から額へかけて、僕の顔を横斷して頭の髪の毛の中へもぐり込んだ。蚤にも随分喰はれたが、斯んな大旅行家は珍しい。之が人間なら慥にシヤックルトンやベアリー以上だ。——尤も斯う蚤の世話を焼

いてゐる中は、無論隻手も何もあるものでない。

一則の公案にだに、猶且斯の如く苦しむのである。之が透つて、夫で一切萬事終了するものかと思つたら、其の外に次から次へと、千六百九十九則あるといふ。此の千七百則盡く透過したのを、大事了畢と唱へて、初めて此に誰某の法嗣と認められる。師家となつて、一道場を率ゐて、他の參禪を聞くのは、所謂大事了畢後でなければならぬ。生半可な坊主が道場を開いて、もゐやうなら、何時何處から、どえらい智識が問答に飛込んで来て、道場破りをせぬとも限らぬ。前瑞巖の南天棒などは道場破りで名高いものであつた。道場を破ると、破つた者が其處の喚鐘を引捉つて行く。今の圓覺僧堂の喚鐘も、和尚が何處やら

から引捉つて來たのだといふ話だ。

だから和尚はえらい、といふことになる。禪門の僧俗が師家に對してびりつくのは、之あるが爲である。今の日本で恐らく誠の師弟の關係らしいもの、禪門に於けるが如きは餘りあるまい。

嗚呼、千七百則の千七百分の一も濟さぬ内に、接心の日はほとんどん經つて行つた。

## 十二 現境

色々と下らぬ眞似をしてゐる中に、大分定力がついて來た。捻つては、野狐仲間て之を境涯が宜くなつたといふ公案を拈

提して、ひたぶる坐つてゐると、や、純一無雜の境に近い處へ入ることが出来て来た。身はびり／＼動きもせず、ぢつとして、心は隻手許を念ずることゝ、眼にも耳にも、客觀的には音響や光線を受けやうが、夫が左ながら硝子に物の寫つた様に少しも心に止つて居らぬ。身を動かさぬから、身の外に物あるか否かは覺えぬ。此に於てか、我身は有れども無きが如く、見れども見ず、聞けども聞かず、空々漠々瓦斯の如く、エーテルの如くになつて仕舞ふ。つまり一種の自己催眠の状態に陥つたので、禪宗では、之を現境と言つてゐる。之を見性成佛の期至れるものと心得て、大得意で參禪して、手厳しく叱りつけられたのは、恐らく僕許であるまい。

之が嵩じると、時々えらい幻視に陥る例へば、身は廓落たる太虚空の中につる下つて頭に物を頂かず、足に地を踏まず、宇宙の真中央に、唯一人放り出された様になることがある。又身は浮べる雲のたいよふ如く、飄々乎として何處を目的ともなく、無限の空間を駆け行くと見ることもある。又時としては、身は東西南北黒闇々たる中を、金輪奈落の際迄もと、下へ／＼と落ち行くとも見る。又脚底はひたと大地に膠着し、頭は億萬貫の大盤石に支へられて、手も出でず、足も動けずといふやうになることもある。斯うなると、公案などは其處除にして、心からなる空中飛行をやつたり、地底旅行を企てたことも屢ある。偶參禪に出で、斯んなことを白狀すれば、皆な是れ魔境だとして、

一も二もなく斥けられた。

其中下腹が段々せり出して来た。どツかりと結伽跣座して、氣海丹田に力を入れると、自然に調子の揃つた腹式呼吸が出来るので、之が胃腸の消化吸収を助けて、坐禪中は腹の空ること非常である。僕は今でも腹に物の溜つた時、三十分も坐禪をやると、必ず請合つて治る。之が日數經るに連れて、白隠和尚の所謂『臍下瓠然たること未だ篠打せざる鞠』の如くなつて来る。

僕は腹の膨れた外に、格別何の悟つた所もない内、七日の接心は事なく終つた。翌日は把針灸治と唱へて、道場一同總休息とあるので、僕等も其の日は名を精進あげに藉りて、八幡前迄

魚を食ひに行つたことを記えて居る。

嗚呼十有餘年の月日流るゝが如く過ぎて、今年此の續燈菴に來て見れば、橙は青うなつて木に残つてゐるが、和尚は大分年を取られた。歸途に壽徳菴に寄つて見ると、流石に此處の和尚は、昔に變らぬ大の元氣で、砂糖水を急須に入れて、茶の代りだとして注いで出し、人の顔をぢろく〜と見ながら、『お前も段段墮落したのう』と仰せらる。和尚の墮落呼ばゝりも久しいものだ。當年我等の俱樂部なりける景福菴はと打見やれば、近頃家ぐるみ小坪とやらに移されて、跡には小やかな庵が立つてゐる。此處で起臥を共にした人々の中には、大分鬼籍に入つ



た者もある。僕は悵然として言ひ知らぬ感に打たれて、圓覺寺を辭した。

二本の警策は無事に持歸つて、頼まれもせぬに、大分いゝんな人を擲つてやつた。肝腎の母に對しては、幾度か之を背にあて、見たが、今に至るまで、何しても打下す氣にならぬ。

(四十二年九月「東京朝日」)

「新公論」に答ふ (如何なる教訓が最も深く感じたるかの問)

僕は三歳の時父を亡ひ、其の以來年若き母一人の手に育てられたれば、母が一言一行は盡く胸身に沁みて忘れ難き訓戒と相成り申候。そが中にわきて僕の心を動かさしは、僕が十五になりたる折に受けたる一言に候。曰く昔は男子十五歳に及べば元服して一人前の武士と相なる譯に候、今までは何につけかにつけ事毎に教へもし叱りもいたし候へ共、此の後は御身自ら御身の始末をつけらるべく、何時までも人に依りかゝらんは賣女の類がなすべき所に候、云々、之より僕は何をすることも相談相手は求めず意に任せて浪々すること二十餘年、とうとう御覽の如き我儘者になり果て申候。

不流行兒放語

一

流行といふは極めて愚なことなり。之に關する材料を蒐めて、『流行號』など出さんとするが如きは、愈々以て愚なり。グラヒツクは以後宜しく『愚ラヒツク』と改名すべし。

二

十七世紀の頃英國の宮女の間にて、パッチといふものゝ流行せることあり。パッチとは絹の小片を顔や頸筋に貼りつけて女振を能く見せんと企なり。初は黒色の絹を用ひ、之を三日月や、星や、輪や十字や、ダイヤや、ハートの形に切りて用ひし

が、後には絹も面白からずとて、プラスチックを用ひ形も四頭立の馬車や、帆掛舟やお城の形などに切り取りたるが流行れり。馬鹿々々しなどいはんも愚かなり。

三

斯る馬鹿々々しきものを顔につけて、女振がよくなるものと心得るたる女共も随分愚の至なれど、此の又パッチの流行し來れるそもくの起原を聞くに及んでは、殆ど開いた口の塞がらざるものあり。パッチの起原といふは、名は忘れたれど、何がしの夫人といふが、顔に痣だか黒子だかありて醜かりしを蔽はんとて、絹の小片をパッチと其の上に貼りつけしより、是れ妙なりと、世の中の女共が真似たるなりとぞ聞えし。

四

スペインサーなりしと覺ゆ、流行とは種族の間の競争より起れるなりと説きたり。されば、強き種族が弱き種族の流行を左右せるは、史上に隠れもなき事實なり。

英國上古の民たりしブリトン人は、野蠻人にふさはしき獸皮の衣を着けたり。英國が羅馬の征服を受くるに及びて、忽ち寛濶なるトーガ風の衣流行し出したり。其の後デーンズ人サキソン人などの征服を受けて、流石に北國式の衣裳流行し、シヤツなどいふものも、此の頃より用ひられ初めぬ。夫がノルマン征服の頃に至りて、羅典風の装又もや流行の勢を盛返し、人は人の知るところなるべし。

五

女の夜會服に胸も露はなるを着くるは、慥に羅馬より來れるなるべし。羅馬の如き熱き國ならば、之にても宜けれど、北獨逸や、英吉利や、露西亞邊まで、之でやつて行かうといふは、理窟のなき話なり。夫も暖室の設備十分なる歐羅巴亞米利加などならばこそあれ、障子の隙洩る風いと冷たき日本に迄、之を見んとは目出たきことの限なり。

男の衣裳は羅馬式より、大分變れり。女の衣裳に至つては、依然として羅馬式の形を存す。總じて女は男よりも愚なるものと見えたり。

六

流行といふは愚なものながら、流行の變遷といふは、多くの場合に於て、一面の進歩を意味せり。左れば一も二も新流行を追ひて得々たるも、きざの至なれど、さりとて全く之を追はざらんも、野暮と知れ。

今より十餘年前、洋服の短褐は無暗に胸の明いたるものなりき。之が四五年前に至りて、無暗に襟の詰りたるものとなりしが、今日は又之が少し開き始めて、前二者の中を行くことゝなりたり。いはは是れヘーゲルの哲學のシンセシスといふ所なり、進歩なり。

流行も何も構はずとて、今日胸の滅法界開いた短褐を着て、銀座通りを濶歩する者あらば、少くとも山崎の親爺に笑はる

べし。山崎の親爺に笑はるゝことを名譽と心得たる輩に限りて、そんな風をして歩くべし。

七

フロックコートの後うしろの腰こしの處にある二個の鈕はたんは、中世の騎士などが劔けんを佩おびたる時に用ひたる釣革つりかわの遺物なり。佩劔けんの用なき今日に在りては、丸まるで無用の圓物なり。さりとして、こんな無用の物は附くるに及およばずとて、棄すて、仕舞ふ譯わけにも行くまじ。流行りゅうかの恐るべき所以ゆゑならざらんや。

八

昨年まねん桑港そうかうに遊べる時、同地どうちの商品陳列館長アイリツシユ大佐だいさといふに會ひしに、彼はシャツの上に襟飾えりかざりも附けずして、大

手を振つて出で来れり。聞けば、彼は如何なる席せきにも、襟飾えりかざりを着けぬ大將なりとぞ。夫れ襟飾えりかざりとは、カラ留どろの鈕はたんを隠す爲に附つくるものなり。カラを着けながら襟飾えりかざりを着けぬは、頭隠あたまかくして尻しつぽを隠かくさぬ類たぐひなり。僕は、大佐の流行りゅうかに與よせざるに與よすること能あたはず。

九

カラあり。此にカラ留どろの鈕はたんあり。此の鈕はたんを隠かくさんが爲とて此に襟飾えりかざりあり。此の又襟飾えりかざりを恰好かつかうよく見せんとて、此にタイピンあり。所が此のピンをうツかり、掏す摸もにでもやられては困こまるといふので、此に近頃ちかごろピン、ガードといふもの出来たり。此の次には此のガードをスタッドにでも流用りゅうようすべき工夫くふう出るかも知

るべからず、或は既にそんな工夫が出来て居るかも知れず  
流行とは、必要と裝飾との間に出来たる私生兒なりと心得  
べし。

十

流行とは、強き者の真似なり。故に流行を追ふといふは、弱者の自覺なり。かるが故に、流行を追ふは、時として謙遜の意を表することゝなるべし。

僕の此の篇は、此の最後の意味に依りて成る。

(四十二年十月「ガラヒック」)

非忠君非愛國主義

標題を一目見た許りで、あつと魂消ること勿れ。忠君を非とし、愛國を非とする主義と解してこそ、兎角の非難はあれ、之を『忠君に非ずんば愛國に非ざる主義』と讀まんに、何の妨ぐる所ぞや。若し又之を『忠君は愛國に非ざる主義を非とす』とも讀まば、愈以てわが意を得たり。眞言亡國律國賊、念佛無間禪天魔も、讀みやう一つにて、『言を眞にすれば、國に國賊を律するなく、念佛間なければ、天魔を禪む』とも解すべし。故に曰ふ、標題を一目見た許りで、あつと魂消ること勿れと、解せりや。

倫敦の南ケンジントン博物館の中に、何十丈といふ高所より、長き一條の綱を吊下げ、其の端に鐵丸一箇をくゝりつけたるがあり、件の鐵丸は、器械の力を假るにも非ず、又風に吹き揺らるゝといふにも非ずして、唯地球の自動せる震動によりて、間斷なく一定の距離を、一定の方向に、振子の如く運動し居るなり。

僕は之を見て初めて、成程地球は動いてゐるものぢや、哩と合點が行けり。地球の動いてゐる位のこととは、學校でも習ひ、書物でも讀んで、疾くより承知してゐたることながら、夫は唯太陽の東から出て西に入るが如きを見て、無理厄體に合點せし

められるたるに過ぎず、僕が實地に其の動いてゐる所を目撃したるは、此の博物館の振子に始まる。

二

天王星の初めて發見せられたる時、其の傾斜の具合とか何とか、何うしても、其の頃迄に知れ居たる太陽系統の諸星の引力に由るとのみにては、解し難き所ありき。是れ必定此の外に別に人の知らざる星の、太陽系統中に存するが故なるべしと、説く者起りて、其の結果、遂に前世紀に至りて、海王星なるものを發見したり。

今の學者は何と説いてゐるか知らねど、僕等が中學に居たる頃は、慥に右の如く教へて貰ひたり。僕等が斯く教はりたる

時、天文學者などいふ者は、何千萬億里の先の事とも知れぬ星の傾射が何うの引力が何うのと、さてく餘計な心配をした者かなと、腹の中で笑ひ居たり。然るに、其の後六七年たつて、エマルソンの論集を讀みしに、其の何かの論文の中に、

『汝が今現に讀める所の書物を、唯太陽の光のみに依りて、讀み居るものと解すること勿れ。實にく、太陽の光も汝が書物の上に落ち來るべし。されども、之と同時に、幾億兆哩を隔てたる星の光も、亦其の上に落ち來ることなきを保せんや』

といふが如き、意味の文言あるを見たり。此の文言に依りて、僕は天王星、海王星などの光が、近くひたくと僕の机の上迄

來て居ることを悟れり。

是より本文に入る。

三

凡そ世に愛國といふこと程、手がりのつき悪きものはなし。國を愛せよとの教は、屢承つて、屢心得たりと雖も、一體何うするのが國を愛するといふことになるものかと問へば、戦争でも始まらねば、何として見やうもなきものゝ如し。犬猫の類ならばこそあれ、頭を撫で、やる譯に行かず、抱いて頬ずりをせんやうもなし。可愛がるに可愛がりやうの分らぬは、誠に國なり。

四

元來、愛國とは愛國の精神として、精神の一種なり。愛國などいふ動詞のやうな名詞を用ふるが故に、何だかちたばたして見ねば、氣の濟まぬ様な心地がすれども、實は己の生れた家は懐しく、わが故郷は戀しといふと同じく、言はゞ心の向けやうの一なり。手足の運動には非ず。

されば國を忘れぬといふ迄にて、愛國の方は事足れり。國を忘れざらん以上、誰かは之を愛せずといはん。唯此の愛國の情は、忠君の念に依つて、始めて、生命を享け活動を生じ來るのみ。少くとも、今の日本に於ては、靜的なる愛國は、動的なる忠君に依つて始終涵養せらる。

忠君といふは、生きたる人を前に置いての話なり。天王星海

王星の光を、机の上迄持ち來れるに似たらすや。

五

所で、其の忠君といふことが、亦むづかし。

九重雲深き處におはす一天萬乗の君と、草深き埴生の小屋の匹夫とは、餘りにかげ隔たり過ぎたり。其の間に忠君の念などいふ心理の關係がありといふさへ、猶賤の女の雲上人を戀へるに似て、畏れ多きに過ぎたるに似たり。忠君の念に、或る暖味を保たしめんには、聊か距離の遠きに失せざるか、疑はる。此に於て天長節といふものあり。天長の佳節は、慥に君臣の間を近づけしむる機會の一たるべし。

六



僕が最も皇室と近づきたるは、昨年の春、伯林に於て久邇宮殿下と問答したる折なりき。問答と言はんは不倫に似たれど、僕は慥に殿下の御問に應じて、様々の事をお答へ申上げたるなり。

崇敬の念は、遠ざかるより起るに非ずして、寧ろ近づくより起るものなることを、僕は特に深く此の時に於て感じたり。殿下は、慥に僕に現り地球の動ける様を見せ玉ひしなり。

七

國を愛せんとすれば、其處に自ら『國家の干城』と唱へて、愛國は己等が一手販賣の如く心得たる者あり。君に忠ならんとすれば、其處に『皇室の藩屏』とやら何とやら、容易に人を

近づけまじとて、築き上げたる石垣のやうな者あり。

一切の人民が盡く國家の干城にして、一切の人民が残らず皇室の藩屏なることを悟らしめよ。(四十二年十一月三日「大阪朝日」)

「實業の世界」に答ふ (思うに成し能はざる所如何の問)

思うて成し能はざること一も之あることなし。意のある處此に道ありと、シエークスピアの翁も申されたり。

成し能はざるが如きことは、僕初より之を思はず。成るか成らぬか兎に角やつて見て、首尾よく參れば一段のお慰み、やり損なつたところがもとくといふが如き、そんなアヤフヤなことを思ふ奴は僕大嫌ひ。僕はそんな男と男が違ふなり。重ねて餘計なことを質問し來りて、汝が四尺八寸の身に怪我あらしむること勿れ。

年頭毒語

一

某の年某の處へ、某々の人々を、僕が引連れ行きたることありと、假りに假定せよ。其の大勢の人々の中に、最も僕及僕等一同をへこませたる者は、基督教の信者と學校の先生となりき。

二

成程、彼等は餘り無駄口も利かず、惡いたづらもせず、其の多くは煙草も太して喫はず、酒も大抵は禁じて飲まず、飲めばとて酔ひしれる程には及ばず、如何はしき女などには、元より以

て近づかんやうなし。日曜日には教會の説教にも出て行けば、聞く人ありと見る毎に、鹿爪らしく神ちや道徳ちやと申す。一寸見た所は、成程如何にも殊勝氣に取られたり。

三

所が、彼等は斯く自から獨り慎むことのみを知りて、絶えて他人の身を思ひやることを知らず。吝嗇にして、狭量にして、自分さへよければ人の事などは一切構はず、己許りが品行方正なる紳士淑女であるかの如き顔をして、高く留つて人を見くびり、他と折れ合ふことを知らず、人に氣を兼ねることを心得ず、二言目には、しやくり出で、兎せよ角せよと、求めらるゝ

限りは、求めずんば已まざらんとす。此に於てか人皆指彈して曰ふ、彼奴はヤッ、彼奴は教育屋、彼奴は情愛のない金吉の徒と。嗚呼、實にも、彼等は是れ品行方正なる不道德の徒なりし也。

四

一體酒を飲まぬとか、金の締りがよいとか、女に近づかぬとかいふことは、偽善者の利器也。僕なんども此の利器に依りて從來屢々奇効を奏したり。奏せられたる世間こそ、よい面の皮なりけらし。

斯の如き獨善主義の道德のみに依りて、人間の價を判断せんとは、事既に古りたり。是あるは是なきに勝れりとは、僕も信ずれども、唯之のみにては何うも斯うもなるものならんや。英

吉利のジエントルマンといふものは、是よりも今少し餘計なことを心得たりとおぼし。少くとも、彼等の道德は、個人的たると同時に、社會的たらんことを期せるに似たり。然らずや。

五

僕をして、某の國の某の役所に勤務したることありと、假定せしめよ。

其の役所には、僕の上に二人の同僚ありき。其の一人を某甲といひき。熱心なる基督教の信者にして、曾て酒色を近づけず、勤勉にして小金を貯へ、妻を愛し子を慈みて、一たびも醜聲の外に洩れたるを聞かず。而も、彼は大のケチンボにして、大の意地悪にして、大のムカ腹立の名人にして、其の上上官には胡麻

をすり下僚にはつらく當りしが爲め、彼れの同僚も下僚も、一人として、彼をよく言ふ者はなかりき、彼れの召使の男女にして、三月と續きたるは希なりきといふ。

之にても世間では、神を恐るゝ敬虔なる基督教徒として通用したる也。

六

今一人を某乙君と言ひき、彼はノンダクレにして女好きにして、金使ひ荒く、仕事にはノラクラしたる者なりき。然りけれども、彼は上官に従順に、同僚に愛想よく、下様の者に思ひやりの情深かりければ、彼れの召使共は、彼れの爲ならば、水火も辭せずと、忠勤を抽んでたり。

僕は此の兩人と日夕机を列べて、事を取ること兩三年にして、つくづくと僕が學校で習ひ來りたる所のものゝ甚だ頼み少きを感じたり。

七

伊藤公國葬の日、彼を主題として修身講話を演ずべしとの訓令、全国の各學校に下りし時、藤公は是れ酒色の奴如何か之を修身講話の主題となし得べけんやと嘆ずる者澤なりしを聞けり。

中學あたりの教師などいふ輩は、人間の道徳を酒色と遠きか近きかに依つてのみ定まる者と心得たる也。こんな心得で居るが故に、彼等は中學の教師位よりは勤らぬ也。吃度叱り

置く。

八

世には、敵國の民を愛することを知りて、自家の僕婢を愛することを知らざる赤十字社員あり、國を愛するといふことを標榜しておきながら、良人をも愛し得ず、兒女をも愛し得ざる愛國婦人會員あり。

此の時豈に友を賣る所の禁酒家、人を陥いる所の『謹直家』、賄賂を取る所の宗教家あるを怪まんや、流石にアメリカのエマソン老人は旨いことを申されたり、曰く人若し余に向つて、奴隸廢止などを説き來らば、われ且つ之に向つて答へて曰はんとす、何千哩かさきの黒奴の世話など焼かんより、

請ふ宅の子供の面倒でも見てやれと。

九

酒を飲むが善いか、飲まぬが善いかと問はれ、無論飲まぬ方が善し、女を近づく方が善いか、近づけぬ方が善いかと尋ぬる者あらば、僕と雖も如何か近づけざるを可とせざらん、唯斯うした奴には、屢々喰はせ者のあるのが、頗る僕の小癩にさはるなり。

『あの人はお堅い』と言はるゝやうな奴に限つて、大抵は融通の利かぬ、滋味の抜けぬ、灰汁の取れぬ、男にも女にももてさうにはなき連中なり。是れ僕の癩にさはる所以の一なり。

十

夫れ堅いといはるゝことほど然かく容易に俗人原の信用を博し得べきはなし。此の如き俗人原の信用を博しおいて、其の信用の蔭に隠れて狐鼠々々と士君子にあるまじき振舞をなす者亦甚多し。品行の方正を以て、僞善者の利器と認むる僕の意は此に在り。是れ僕の癩にさはる所以の二なり。斯く僕の癩にはさはると雖も、存外人の癩にはさはらざらんも知るべからず。是れ僕の癩と人の癩と、癩の性質を異にすればなり。

十一

記得す、明治二十八年臘月、僕菊池長風を廣島監獄に訪ひて、歸途汽車して播磨を過れることあり。明石驛より若き夫婦の、

今年ばかりなる赤子の快げに寢入りたるを連れたるが、我が車に入り來れり。男は其の子をかき抱きて、衆客のこみ合ひたる中へのさばり込み、女は其の眼を覺まさせまじとて、人々をかき分けて、其の側に坐を占めたり。眼中又他人あることなし。同車の客皆閉口して思はず苦笑す。

他人の迷惑を構はざる賢夫良妻嚴父慈母此に在り。近う寄つて御拜を遂げらるべし。

十二

僕は此等の意味を外にして、此の三五年來、僕の道徳が慥に一段の進境を見たるを確信す。

小乗の行者共よ、承りおけ。(四十三年一月「新佛教」)

變な女

一 没落

此の夏、入澤醫學博士を相州葉山の別荘に訪ねた歸途、逗子の停車場迄來ると、七八歳の女の兒の、其の父らしい四十四五の男に脊負はれたのが來合せた。痛はしや、其の女の兒といふのは、萎びたといはうか、へしやげたといはうか、誠に見る影もなく、瘦せほうけて、片手には淺田飴か何かの罐を左も重さうに持つてゐる。之がブラットホームに入つて、親の脊から下されたのを見ると、背は屈まり腰は曲んで、辛らく踏み締めた脚は、ゆら／＼と左ながら宙に浮いたやう。唯ぼんやりと光のな

い眼で、父の顔を見上げたさきりで、口も利かねば身動きも元よりしない。僕は見るに見兼ねて、思はず顔を背向けた。僕に病身の娘が一人ある故か、僕は斯な小兒を見る毎に、何となく胸が一杯になつて、我知らず涙ぐんで來る。見まいと思つても、つい目が其の方に向く。思ふまいと思つても、姉終頭に其の傍が浮んで、時には夜一夜其の夢ばかり見ることがある。而して斯なことの有つた日か、又は其の翌日には、氣のせいかな、屹度碌でもない話を聞かされるに定つてゐる。

歸りは、久しぶりに圓覺寺の舊知を尋ねる積で、鎌倉で汽車を下りた。鶴岡八幡宮の後手から、小袋坂を通つて、山の内に差菟ると、はや圓覺寺の前の杉林が見える。日の暮方とは言ひな

がら、時は八月の中旬、此處迄てくくくと歩いてくる中に、身は汗みづくになつて、息もつけぬ程の暑さ。兎も角も一休みしてと思つて、とある茶店を覗き込めば、僕より前に書生が二人奥の方にて、其の中の一人が、しげくと僕の顔を見てゐた。何も見たやうな顔だが、誰だか思ひ出せぬ。見たやうなところか、餘程親しい顔である。決して昨今の顔ではない。はて誰やらであつたなと思つてゐる中、彼は突如として、『卿は杉村君でありませんか』と言葉をかけた。『やッ御無沙汰』と僕は我知らず答へたが、實の所、何時から其の所謂御無沙汰をしてゐる人であつたか、また考がつかなくなつた。彼は白緋の浴衣に細い三尺帯を締めて、筒の煙草入を腰にさしてゐる。何見ても、毎年

夏休に、參禪の爲とて、此の邊へ寄つて來る書生としか見えな

い。  
 其の中茶店の主婦が、何かした拍子に、岸さん何やら斯やらといひ出した。成程、彼奴は岸だ。越前の人、岸政次だと思ふと、彼の人並より長く飛び出た。咽佛が目についた。いや岸ならば、僕の俄に思ひ出せなかつたのも無理でない。彼ならば、斯る處に斯る姿で斯る折に出會ふべき筈はないのである。

僕が初めて彼と相識つたのは、明治二十九年の夏、遠州の新居で佛教夏期講習會の開かれた時であつた。何でも二川の觀音から、豊橋へ一緒に遠足に出かけたことがある、と覚えてゐる。彼は其の時、千葉の第一高等學校醫學部の學生であつた。其



の後一兩年經つて、彼は病氣に罹つて、療養旁々坐禪の爲に鎌倉へ來て居つた。僕と親しく往來したのは其の時である。能くづけくくと無遠慮に物を言ふ、無愛想な男であつたが、併し腹の中は真正直な親切な人であつた。其の後病氣が全く治つて、故郷に開業してゐる中、急に思ひ立つて、耳鼻咽喉科の研究の爲に上京したとて、僕を尋ねて呉れたことがある。夫から歸つて約十年、時々人の噂に聞けば、彼は益々強壯になつて、醫者は流行る、金は出来る、盛名儕輩を壓して、すばらしい勢であるとのことであつた。だから、岸と聞けば、僕には直ぐ五六の書生に先生先生と侍かれて、自用车で出入するモーニング、コート姿の病院長が思ひ浮ぶ。今見るやうな見すばらしい様では、其

の人と聞いても、其の人と信じられぬ位である。

『避暑ですか』と、僕は平凡なことを聞いた。「いや、ずつと此方に居るんです」と彼は言ふ。元氣は装つてゐるが、調子は沈んでゐる。やがてさも嘲けるやうな笑を含んで、「實は坊主になる積で、東慶寺の老師(釋宗演師を指す)に御相談に出たのですが、少し待つたが宜からうと言ふお話なので、其の儘になつてゐるのです」と言つた。言葉の端々如何にも仔細ありげには聞えるが、人通りの多い茶店の店頭では、立入つたことも聞けぬ。僕は故さらに話頭を外して、前に彼と此の鎌倉で會つたのは何年前であつたかの、其の後身體は全然よくなつたかなど、聞いたが、其のうち彼の調子は何時しか昔の岸に立

歸つた。『いや君前に此處にゐた時は、身體に故障がある許りで、他は一切無事だつたが、今日は身體が無事なだけで、名譽も財産も地位も皆亡くなつてゐるんだ』と、憮然として、左ながら物を投げやるやうな風に言つて了つた。  
斯う聞くと齊しく、忽然として逗子で見た女の兒の姿がまぢまぢと僕の目に浮んだ。

二 強姦

丁度其の頃、米國から歸つたばかりの鈴木大拙君が東慶寺にゐるといふので、兎も角もと、岸と二人で、尋ねて見た。大拙君は、一昨年僕が倫敦に居た時、遠く大西洋を隔て、一二度手紙

のやり取りをしたことはあるが、親しく相見るのは、十有餘年の昔、京都の建仁寺で分れたきりである。隨つて談は太分あつた。

やゝ程經て、大拙君が藥石にと坐を立つた後で、僕と岸とは此に初めて差向ひとなつたので、岸は之を機會に、極めて手短かに、其の没落して今日に至つた次第を語つた。彼れの語る所は、事毎に打驚かるゝことばかり。僕は明治の昭代に、猶且斯の如き怪事があるかと憤らざるを得なかつたのである。  
岸の言ふ所に據れば――

彼は去る三十七年の七月、其の郷里なる越前某の町で開業したが、幸と町内の氣受もよく、患者も相應に集つて、間もなく、

近村へ出張所の一つも設けるやうになつた所が越えて二年、三十九年の十二月に至つて、或日突然警察から呼出を受けた。行つて見ると、強姦の告訴が出てゐるから一應取調べるとの署長の話だ。何でも十一月の末とかに、右の出張所へ来た婦人の患者を、岸は内診に托して、強姦したとか何とかいふのであつたさうな。岸は身に覚えのないことゝて、丸で寢耳に水、何が何やら見當がつかぬ。一時は茫然と呆氣に取られて了つたが、兎も角も署長の間に應じて、答へるべき限りのことは答へて引下つた。餘りの馬鹿臭さに、歸途は知合の人を尋ねて、斯く斯くの次第で、今しも強姦の取調を受けて来た所だと話すと、一同は手を拍つて大笑をした上、中には「岸さんも大分開けて

来たわねえ」と冗談をきく婦人さへあつた。

斯な根も葉もないことが、一生の大事にならうとは夢にも思はなかつた岸は、取調を受けた後も、格別氣にはとめてゐなかつた。所が其の年も暮れて、翌四十年の一月の末、又もや岸は呼出されて、今度は豫審廷で有夫姦の被告として取調を受けた。相手の女は前の時と同じ人で、村の相應な百姓の妻女、年は二十八、子供が三人ある。腦が悪くて、兩三回岸の診察を受けに行つてゐるうち、岸は其の患ふる所子宮に在りと稱して、或日強て内診を遂げた。内診といふは局部を検査することである。女は内診中恥かしさに兩手で眼を覆うてゐたが、ちと様子が違ふと思つて、眼を開いて見ると、既に強姦されて了つてゐたの

だといふ。其處で強姦の告訴をして見たが、抵抗の跡が見えぬとて、不起訴となつたので、今度は改めて有夫姦となつたのである。——成程、そんな女は診察したことがある。併し、自分は婦人科の醫者でもなし、婦人科の醫者が使ふやうな器械も持たず、無論内診などは唯の一回もした覺はない。況や餘事は知らず、女の事に關しては、昔から不具者でないかと、友人から怪まれた位に、品行方正を以て誇つてゐる岸である。夫が内診に托して強姦などゝは、出鱈目をいふにも程がある。べらぼうな話だと、岸は思つた。

よもやと思つてゐる中、豫審の決定は有罪となつて、公判に回された。公判では何かといふと、灰吹から蛇の出る譬さしも、岸が初手から馬鹿にしきつてゐた此の被告事件は、恐ろしいかな、公判でも有罪となつて、岸は重禁錮八箇月の宣告を受けた。

此に於て、岸は俄に狼狽し初めた。今迄はまさか〜と油断してゐたが、此の様子では、結局何な目に遭ふか知れたものでない。我が潔白は天知る、地知ると許りすましても居られず、岸は一面控訴の申立をすると同時に、一面には證人の喚問を頼むやら、證據を集めるやら、大騒ぎに騒ぎ回つた。

第一、此の事件に對する犯罪の證據といふは、唯被害者と稱ふる女自身の證言ばかりで、其の外には、何等之を確むべき直接間接の證據といふものがない。其の上、高い聲では言は

れぬが、被害者が其の辱めを受けたといふ様子が、如何にも是れ事實にありさうにもない所であつて、現に斯いふ態度を以てしては、生理學上斷じて姦淫などの行はるべきものでないといふ某醫學博士の鑑定書をさへ、岸は持つてゐた。

だから、控訴では、本人も無論無罪と信じ、辯護士も亦斯く信じてゐたのみか、東京で名判官の聞え高い某判事なども、此の公判始末書を読んで、東京なら儘に無罪になる所だと言つた位であつた。——夫が又如何にぞや、運悪くも其の頃有罪判事の名法曹界に聞えた某君の手にかゝつて、敢なくも控訴棄却と相なつた。

岸は叶はぬ迄もと、遂に大審院に上告した。上告はしたが、大

審院での争點は唯有夫姦の被告の可分不可分といふ問題に止つて、法律は果して姦夫姦婦の一人のみを罰して他を免じ得べきや否やといふ問題を決するに過ぎなかつた。夫が被告可分と判決せられて、岸が最後の死物狂ひも、遂に見事に失敗に歸した。今は何することも出来ぬ。岸は怨を呑んで、獄裏の人となるより外はなかつた。

裁判は確定した。岸は遂に八箇月の重禁錮に服したのである。

折ふし、大拙君が食事を終へて歸つたので、談は此で途切れた。いづれ委しいことは其の内重ねてと契つて、僕は飄然と東慶寺を出た。日はとツぷりと暮れて、空は所がらなる鎌倉山の

星月夜、星斗闌干として杉の木立の間に輝いてゐる。——嗚呼併し、汝が光明も、まだくなく、此の世には輝き足らぬと僕は思つた。

### 三 一件書類

其の後四五日して、岸は一件書類を僕の方迄送つて來た。不起訴となつた強姦被告事件の方には、署長の意見書、告訴調書、各種證人参考人の聴取書。又有夫姦被告事件の方には、檢事の豫審請求書から始つて、被告や證人の訊問調書、現場の檢證調書、豫審決定書、公判始末書など、始と危然たる大冊をなしてゐる。僕は逐一之を讀んで見た。

幸にして從來裁判所の事などには縁の遠かつた僕のこととして、僕は生れて以來初めて斯な書類を讀んで見たのである。ちと餘談には渉るが、僕は少し新聞記者の立場から見た一件書類觀といふものを書いて見たい。一言にして之を覆へば、いやはや實に甘いものである。

先づ此等の書類には、アテ字がある、誤字がある、雅俗入り亂れた希世の珍文がある。殊に一字一句の使ひ様によつて、事件の根本問題を決すべきほどの問答さへ、輕々に筆を下して、些の苦心を費した跡を認めぬ。夫れ同じ『知りません』の一語でも、白ばツくれていふのと、言句に詰つていふのと、きツぱりと言ひ放つたのとは、夫々意味が違ふ。僕等なら其の違つた意

味を明かにしたいばかりに、或は前後の關係を叙し、或は問ふ者答ふる者の意氣込を説き、或は語勢の強弱遲速を寫して、猶且戦々競々として、見たるが儘の光景を歴々と讀者の眼に映せしめ得ざるを恐るゝ者である。夫をぶツきらぼうに綾もななく澤もなく書き流して、果して能く眞個の活躍した光景が傳へらるゝだらうかと、僕は疑つた。謂ふこと勿れ、文書は第二段、裁判の骨子は審理に在りと。公判に關係した裁判官辯護士が、先づ事件に對する大體の方針を定むるのは、豫審調書に依るのでないか。控訴裁判に關係したる裁判官辯護士が、當該事件に關する智識を得るのは、主として公判始末書、其の他の書類に依るのでないか。人間を前に置いて、其の顔色を見、其の態度

を見、其の言語を聽いてさへ、尙事件の真相をつきとめ兼ねる世の中に、修辭の色どりなき、生氣索然たる、所謂一件書類なるものが、どれほど迄生きたる人間の目的決意感情を表はし得やうぞ。斯いふ書類を基礎の一として、斷案の料に供するとは、流石に手慣れた仕事とは言ひながら、えらいものだ。僕は感心した。

併し此の僕等新聞記者の立場から見れば、叙して叙し盡さざるが如き書類の中にも、讀んで見れば、成程大分變なことがある。第一、女は兩手で眼を覆うてゐる間に、何時の間にやら、既に強姦せられて了つてゐたのだとある。第二に、寢臺の上に仰臥して、兩脚を——いや之はちと此處へ書き悪いが併し斯な

様では、到底強姦などの行はれるものでないと、篤學を以て聞えた某醫學博士が鑑定してゐる由は、前に述べた岸も亦之で姦淫罪が成立つとは、全く醫學を無視した裁判だと憤つてゐる。僕は此の最も重要にして、且最も讀者の好奇心を挑發し得べき點を此處に明に叙し得ざるを憾とする。第三に、強姦されたとはいふ女が、聲も立てず、助も呼ばず、又別に小言も言はずして、徐かに宅へ歸つたとなつてゐる。第四に、檢證調書によれば、寢臺は藥局を兼ねた診察室の一隅にあつて、診察室とは幕一重隔てたきり、藥局の後は板壁を隔て、患者溜所。寢臺の後は唐紙一枚で直ぐ醫員控所となつてゐる。而して、其の時此等の室に居合せた者は、誰一人被告に不利な證言を與へて居らぬ。

第五に殊に可笑しいのは、強姦されたと自任してゐる所の女が、強姦されたといふ日から二週間の中に、平氣で自身藥を貰ひにも來てゐれば、又診察も受けに來て居る。要するに、事件の唯一の證據は唯被害者の陳述だけである。岸の平生を知れる僕には、何しても岸に斯な不心得なことがあつたとは思はれなかつた。

夫ならば、此の女こそ誠に變な女である。何が爲に己の恥も構はず、斯な根なしごとを言ひ立て、人を陥れやうとしたものだらうか、夫が頓と合點の行かぬ。

#### 四 變な女



相當の資産ある家の妻女だといふから、無論金を強請るなといふ意味ではなかつたらしい精神に異状があつたのかといふと、さうでもない。さては、此の女初から岸に惚れてゐて、戀の叶はぬ意趣晴しにてもやつたのかと思つたが、そんなことはないと、岸は打消した。

尤も、此の女は此の邊で名うての洒落者で、岸の出張所へ来た時も、心ゆくばかりに盛装して、來る毎に變つた衣物を取りかへて着てゐたといふ。來ては、藥局の者と、人の妻たる者に似げのない冗談を言ひ交したといふ。今の家へ嫁がぬ前には、随分如何はしい風評の立つた女だともいふ。

更に切り込んだ人の噂に據ると、彼は某駐在所の巡查と怪

しい中であつて、或夜其の密會の現場を本夫に認められた。認められた時、言譯に困つて出任せに岸の一件を造り上げ、さて今しも之を告許する手續に就て、件の巡查と相談中であつたとか何とか、言譯をしたのが、そもく、今回の事の始りだともいふ。

併し此の女の御亭主なるもの、證言に據れば、妻は佛教の篤信者であつて、品行方正であつて、夫には能く事へて、子供には慈愛の心の深い者であつたとある。「讚美せよ、アーメン」と言ひたくなる。

## 五 岸

女の本心なるものが、僕には分らぬが、此の事件の薪に油を注いだ事情は、慥に一つある。岸は元來木で鼻をくゝつたやうな男で、氣心を知つた患者や友人にこそ、評判は宜かつたが、其の筋の役人共には、憎まれ切つてゐた。之が爲に、此の事件に就ては、郡長や署長や検事や豫審判事の間、に多少の連絡があつたとさへ傳へられてゐる。

岸は物堅い男で、今年三十何歳に及ぶまで、未だ一たびも婦女子を玩んだことはない位の堅造である。斯いふ男に限つて、兎角品行方正を得意がつて、何處やらに灰汁が残つて、始終ごつごつとしたがる者だが、岸は正しく夫であつた。彼が言語動作は、慥にリファインメントを缺いてゐる。怒らせなくてもす

むことを、彼は怒らせるやうにいふ。快く言ひ聞かせ得べきことを、岸が言へば不快に聞える。自分は輕妙な冗談の積でいふことにも、其の實は、澁のぬけない皮肉が多い。此の調子で、彼は傳染病患者の届出を迫つた巡查を悪罵し、嫁の世話をしかけた郡長を冷かし、さては下らぬ理窟を警察署へ持ち込んで、署長と喧嘩したことがある。

夫のみならず、一體岸は人相が悪い。如何にも意地の悪るさうな顔をしてゐる。之が得意氣に調子に乗つて喋り出すと、小鼻を膨らせて、上唇を尖らせて、而して額に猛惡な深い豎の皺を寄せる。此の豎の皺が寄る時、兩眼の腫がぐいと坐つて、如何にも毒々しい恐い顔になる。斯な顔で彼な憎さげな口を利い

ては、先づ大抵の者は中てられて仕舞ふ。郡長や署長が、彼を憎むに至つたのも無理ならぬ。憎い奴だからやっつける位のことは、或は恐る、語り合つたかも知れぬ。

一方では斯く憎まれてゐたが、郷黨の間では随分もてた學問も新しい。技術も進んでゐる。真正直な唐竹を割つたやうな男である。身持が正しくて、曾て忌はしい風評を立てられたことは、ない。其の上強い者には随分突慳貪につつかゝるが、同輩や目下の者に對しては、情が深くて親切である。だから岸々と至る所に持て囃された。

彼があらぬ嫌疑を蒙つたとき、彼を識れる者は誰一人之を眞としなかつた。だからさしもの事件に對して、唯の一行の記

事も土地の新聞には出なかつた。裁判の確定する迄、一たびも拘禁せられなかつた。彼は、平生の通り診療の事に従うて、門前常に市を成した。初審の辯護士は初審の判決、重禁錮八箇月に三箇年の刑の執行猶豫がついてゐたので、極力岸の控訴を止めた。併し岸はいくら執行猶豫がついてゐたので、そんな冤罪に服する譯に行かぬとて、聽容れなかつたので、其の辯護士は氣の毒だとして、一切自費で控訴の手續をして呉れた。彼が入獄中は、監獄醫も教誨師も非常の同情を彼に寄せて、殆ど囚人の期し難い優遇を受けた。刑期満ちて獄を出づるに及んでは、有志が盛大なる慰藉會を開いた時、土地の藝妓が總勢すぐつて盡く自花を焚いて出た。一旦取り上げられた岸が開業免狀の

再下附を郡の有志先づ其の筋に嘆願し、次いで縣醫會の決議を以て再び之を願ひ出た位である。——唯不幸にして、免狀は今以て再下附とならぬ。

## 六 自殺

或日岸は突然僕を俱樂部に訪ねて来て、前日東慶寺で語り遺した節々の、一件書類の中にも見えぬものを語り足した。——九月の初の残暑の厳しい日であつたと記憶する。岸は白緋の浴衣に黒絹の羽織を被つて、前に見た時ほどに見すばらしくはなかつた。

色々の物語彼此三時間もあつた後、彼は悵然として、其の地

位の竟に回復すべからざるを語つて、『もう生れ變つた氣であります』と意味ありげに言ひ放つた。斯なことは斯な身の上の人の能く口にする所だが、此の時は特に僕の耳に異様に響いた。問ひ返さうとして顔を上げる拍子に、先方は夫と知つたか、問はるゝを待たずして、『實際僕は一度死んで來たのです、精神的にも肉體的にも』と附け加へた。

實にも彼は一たび鬼籍に入つて來たものださうなといふのは彼が控訴に破れ、上告に破れて、萬事此に休すと見た時は遂に毒を仰いで、自殺したのである。

忘れもせぬが、四十年の十一月七日、彼は愈々上告棄却の電報に接した。午前中は故さらに平氣で、いつもの通り患者を診

察しておいて、さて其の午後、不快と稱して、二階の一室に籠り、先づ心静かに書置を二三通認めた。盛る所の毒薬は鹽酸モルヒネ零コムマの五之を注射器に取つて、下腿の皮下にぐツと射した。僕は醫者の家に育つて、幼い時から聞いてゐたが、元來モルヒネ自殺といふものは事頗る面倒なもので、〇〇五位でも死ぬるが、夫より少くは、匿くなる許りで、生命に障らぬさりとて無暗に多量に服した所が、吐いてく、腸迄も吐き出す位に苦しむが、苦しむ許りで矢張り死ぬぬ偶々分量を整へて服んだにしても、呑んだのでは、運悪く(？)吐して了ふことがある。岸は流石に醫者の心掛け、萬全の策を取つて、之を皮下に注射したのである。之ならば直ぐ睡氣を催して、睡つてゐるうち

に、其のまゝ死んで了ふ。苦しくも何ともないといふ。

注射の後、岸は直ぐ蒲團を被つて寝た。寝た後は、尤も覚えなかつた。正しく身は半ば死んでゐたのである。夫から二日経つて、岸は眼を覺した。何時しか助けられてゐたのである。

後で聞くと、岸が臥床に入つて、物の三十分と経たぬ頃、變な咳拂の聲が下に聞えた。折節、食事中であつた代診が、何だか不思議な咳の仕方と怪んで、あわて、二階に駆け上つて見たら、注射器が枕許に轉つてゐた。代診は夫と察した。乃ち急ぎ注射器の用意を整へて、所構はすカムホルの注射を施した。何でも初めて注射を試みた時は、岸が夢中で蒲團の中へもぐり込んで逃げやうとしたので、代診は大膽にも先づ、肩に一本突ッ

込んださうな能く斯な思ひ切つたことが出来たと、本人も後で驚いたといふ。

此の氣轉の利いた代診氏の働きによつて、辛く玉の緒を繋ぎとめたが、岸は半睡半醒の状態で、二日を送つた。其の間には、一方で再三再四の注射に依つて元氣の亢奮を謀り、一方では枕邊に寄つた親戚故舊が、絶えず患者を覺し起して眠らせぬことに勤めた。カムホルは解毒の効のあるものでないが、モルヒネの中毒は眠らせさへしなければ、一定の時間が経過する中に、自然に酒の酔が醒めるやうに醒めて了ふのである。岸は一切丸で死人同様、一時は呼吸が一分間二回位になつて、ほろつと大きな息を一つした切り、其のまゝ絶えて、夫がもう引取

つて了つたかと思つてゐる中に、又ほろつと吐くやうなこともあつたといふ。

『樂な死方はモルヒネに限る。今度君が死ぬなら、僕がちやんと分量を合せて注射して上げませう』と岸は淋しげに笑つた。

## 七 流浪

自殺の志を果し得ずして、岸は遂に悶々の裡に囹圄の人となつた。

苦役八箇月の後、娑婆に歸れば、嘗て貯へた多少の金は、訴訟の費用に粉も灰もなくなり、剩さへ其の間に父は死し、弟は死

して、母は親戚の人の世話になつてゐる。之さへあればと思ふ  
 醫術開業の免狀は、取り上げられて了つて、彼は羽翼をもち  
 た鳥同様、尾羽打ち枯らした浪人となつてゐた。

一先富山に出て人の代診を勤めてゐたが、警察が無免狀だ  
 とて喧しく言つて来る。次に京都の知人の許に身を避けたが、  
 代診でもしては居らぬかと、何處迄も警察が手を回して調べ  
 に来る。天涯地角、身を置くに置き兼ねて、彼は遂に鎌倉に逃れ  
 て来た坊主にするのは如何にも残念なとして、彼の舊師舊友孰  
 も同情を寄せぬはなきが中にも、彼が故郷の郡醫會では、今春  
 其の決議を以て内務大臣と縣醫會に陳情に及んだ。内務大臣  
 の方は不首尾に終つたが、縣醫會の方では、更に調査委員を設

けて、數箇月間賣藥行商人をして事情を密偵せしめるやら、委  
 員が現場に臨んで檢視をするやら、色々手をかへ品をかへて  
 取り調べた揚句、結局斯る事の行はるべき場所に非ざるを認  
 めて一同多大の同情を岸に寄することとなり、其の結果遂に  
 岸問題の爲に特に臨時に縣醫會を開いて、満場一致で更に内  
 務大臣に陳情に及ぶことを可決したといふ。岸が若し醫者で  
 なかつたなら、刑期満つると共に罪は贖ひ終つて、何とでもな  
 つたらうが、怒ひ醫者である許りに、課せられた本刑の外に、開  
 業免狀の返附といふ處分が何處迄も尾いて回つて、彼は手も  
 足も出せないのである。

嗚呼、醫者でありながら、醫者は出來ず、寺に入りながら、僧に

はなれず不幸なる岸は、隱岐壹岐の島の端なんどでもあらう  
 ことか、日本帝國の首都東京を去ること僅に三十哩の鎌倉に、  
 今や罪なうして配所の月を眺めてゐる。  
 彼を陥入れた女の心持が聞いて見たい。

(明治四十二年十二月十日稿同四十三年一月「中央公論」所載)

厲人厲語終

明治四十三年四月廿七日印刷

明治四十三年四月三十日發行

定價六拾錢

郵稅六錢

著者 杉村廣太郎

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

發行者 田中源三郎

東京市本所區番場町四番地

印刷者 朝岡平藏

東京市本所區番場町四番地

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場



發行所

東京市麴町區有樂町  
振替口座東京三六〇

有樂社

電話本局 特二〇九五  
三七八〇



東京大阪朝日新聞所載 澁川玄耳著

四版

藪野 十 世界見物

四六版洋裝特製箱入  
挿畫口繪澤山挿入  
定價壹圓五拾錢  
郵稅拾貳錢

著者が世界を漫遊したる紀行文なり其の觀察の奇警にして文章の輕快なる既に定評あり加ふるに當代の大家不折、春僊、未醒、孟郎、樂天の五大畫伯の挿畫と各國の風景風俗の寫真版百餘個を挿み殊に再版より「歐米漫遊の秘傳」を増補したれば歐米を漫遊せんとする人は勿論世界の太勢に心する人は必讀の書たり

發行所

東京丸の内有樂町三丁目  
振替口座東京三百六十番

有樂社

東京大阪朝日新聞所載 楚人冠杉村廣太郎著

改裝 增訂 減價

大英游記

第七版  
定價七拾錢  
郵稅八錢  
上製五拾錢  
壹圓拾貳錢

本書の眞價は左記諸名氏の批評によりて盡せりと謂ふべし  
◎京都帝國大學講師内藤湖南氏曰く「我國の紀行文中、此くの如く長篇にして、而も此くの如く面白き妙文は、明治文壇未曾有の産物なり」と。  
◎國民新聞主筆徳富蘇峰氏其紙上に於て曰く「此れは記者の眼と、文人の手とを遺憾なく發揮したる、一種縦横流の快心快讀の好游記なり」と又曰く「其情趣躍々として、紙外に活動すと又曰く「筆を使ふ舌を使ふが如く、舌も猶及ばざるの概あり」と。  
◎實業界の巨人澁澤榮一男曰く「楚人冠の大英游記は文辭輕妙にして飄逸、叙事多面に取つては更に至深至大の感興を興ふるものなり」と。  
此の如き好評を博したる本書は第六版を重ねたると同時に原版臚減再び印刷に堪えざるを以て今般改版第七版を發行すると共に寫真版を除き實用的製本を施し楚人冠文章愛讀者諸君のため特に大減價を以て發賣す

東京丸の内有樂町  
振替口座三六〇  
有樂社

大隈伯序文 生駒翺翔著  
報知新聞所載

# 澁澤榮一評傳

菊判洋裝二百頁  
男爵及家族住宅寫真版  
定價八拾錢 郵稅六錢

實業界の巨人澁澤榮一男の傳記なり少年時代、陰謀と脱走、一橋家仕官時代、洋行、静岡退隱、在官時代、商界馳驅時代、社會に於ける男爵、性情と逸事の八章に分ちて遺憾なく評論す、大隈伯の序文に曰く……是を要するに澁澤男の人格と事業は極めて多方面にして、世の師表と爲すに足るもの決して尠からず、従つて男の公私生涯を序述したる本書は、以て實業家の模範たらしむ可きのみならず、併せて青年子弟の立志に資せしむ可きや勿論也と以て本書の價值を知るべし

發行所

東京丸の内有樂町三丁目  
振替口座東京三百六十番

有樂社

再版

# 人物畫傳

大阪朝日新聞所載 畫傳子編

菊判假製二百五十頁  
各人物寫真版挿入  
定價四拾錢  
郵稅六錢

畫傳中の人物は海の内外を通じ主として現代の人物百人を選む而して政治家あり學者あり代議士あり實業家あり發明家あり女流教育家あり藝人あり所謂社會の各階級を通じて之れを評論す其の筆鋒の鋭犀にして觀察の奇抜なる諸君をして思はず快哉を叫ばしむ、實に破天荒の快著なり

發行所

東京丸の内有樂町三丁目  
振替口座東京三百六十番

有樂社

北坪正五郎序 和田正子編

# 新西洋笑府

四六版洋裝特製美本  
本文全部二度刷  
彩色刷石版口繪數葉  
木版コロタイプ挿畫每頁挿入  
定價壹圓 郵税八錢

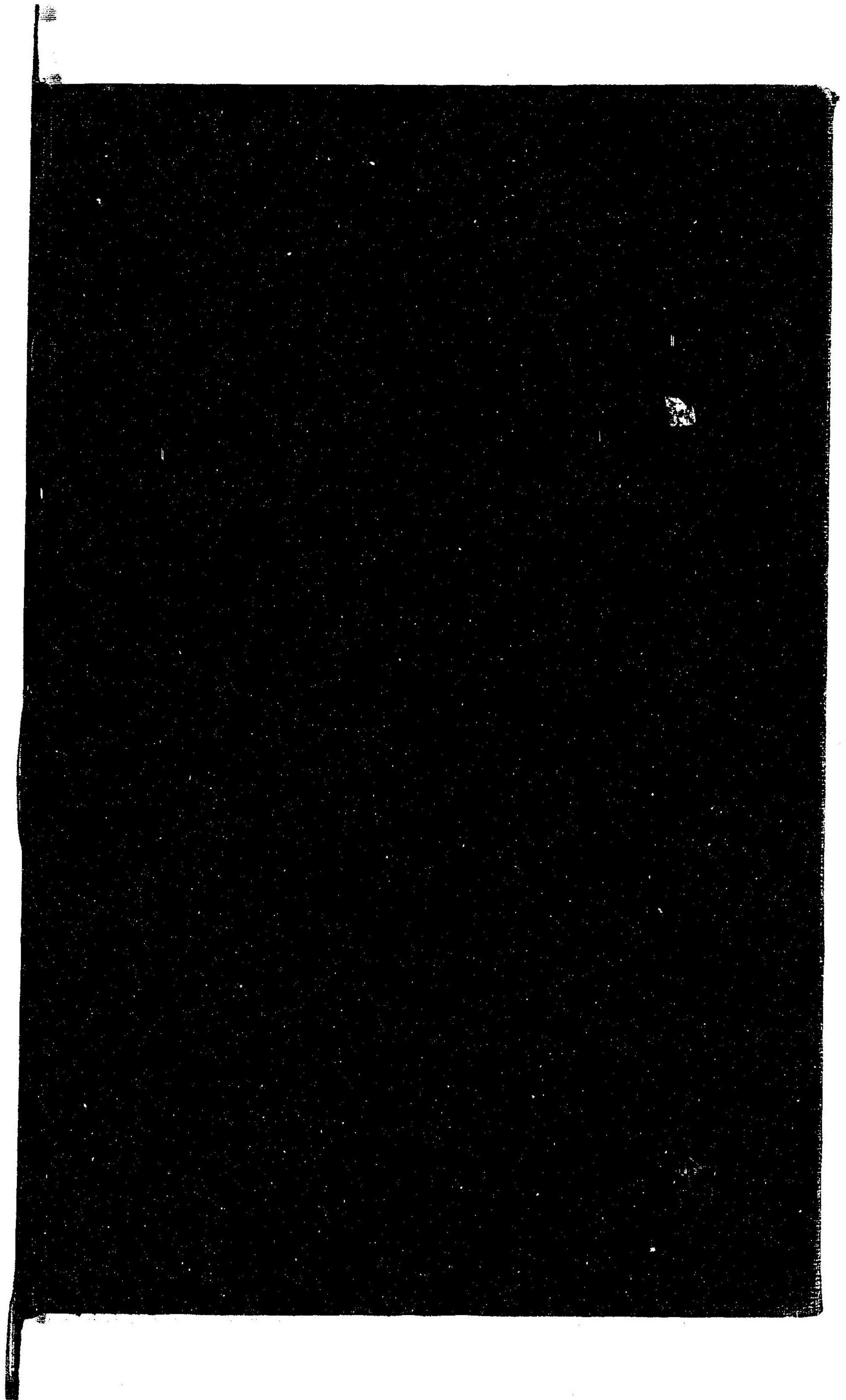
本書は和田正子が歐米のあらゆる滑稽書類より最も上品にして滑稽趣味に富みたる話材二百有餘種を蒐め加ふるに當代漫畫家の泰斗北澤樂天氏の特に本書のために揮毫されたる漫畫數十個を挿入し且つ巻頭には坪井正五郎氏が滑稽洒落なる序文を添へたれば何人も本書を座右に備へて机上の珍とせられよ

發行所

東京丸の内有樂町三丁目  
振替口座東京三百六十番

有樂社

96
452



96

452

102467-000-0

96-452

厲人厲語

杉村 楚人冠 / 著

M43

EAG-0340

